う日本語で答へる。

――あなた、これはわたしのお友だちの女から來た手紙よ。

おゝ！　クリザンテエムのこれ等の女友だち、彼女等はまあどんな顏をして居ることだらう？　この同じ箱の中に彼女等の肖像がはひつて居る。長崎のよく流行る寫眞屋の上野の姓が裏についてゐる手札形の彼女等の寫眞。それは扇の繪の中に可愛らしい寫されるにいゝやうな恰好で、支頭柱の中にぼんのくぼを抑へ附けられて『もう動いちやいけませんよ。』と云はれた時の姿勢を崩すまいとあせつて居る小さい女たちの寫眞である。

これ等の女友だちからの手紙を讀んだら隨分面白い事であらう。――わけても私のムスメが彼女等に送つた返事をよんで見たら。……

二十九

八月十日。

今夜は大雨。深くて黑い夜。十時頃私たちのいつも行きつけのよくはやるお茶屋の一軒から歸つて、私たちは、イイヴとクリザンテエムと私は、十善寺の私たちの家へ登つて行く。眞暗い段々やどつ〳〵した小徑へかゝらうとして町の明りや賑かさを見捨てねばならないあの曲り角、大通りのいつもの角まで來る。

そこで、登り始める前にマダアム・トレエ・プロオブル〔お晴さん（原文の註）〕と云ふ年とつた女商人の處で先づ提灯を買ふ段取りになる。私たちは彼女の常得意なのである。――私たちの消費する夜の蝶々や蝙蝠のさま〴〵の繪の描いた

紙の提灯の數は驚く可きものである。——店の天井には夥しい提灯が束になつてさがつてゐる。そして年とつた彼女は私たちの來たのを見てそれを取りはづす爲めに臺の上に乘る。——、、、ねずみか赤が私たちの常用の色である。お晴さんはそれを知つてゐるから綠や青へは手をつけない。けれどもその中から一つ引き抜くのがいつも大變な騷ぎである。——提灯をつるした棒や結はひ附けてある麻糸がごちや〳〵になつてゐるものだから、大袈裟な手附きで、お晴さんは斯うして私たちの時間を無駄にする事がどんなにか氣の毒だといふ事を云ひわけする。おゝ！　それが彼女だけの骨折りで濟むと云ふのか？　……併し斯んな縺れ合つたがらくた物が人間の威儀なんか考へるわけのものぢやない。さまざまなおどけた身ぶりで、彼女は提灯を嚇かしたり、私たちを遲らす原因になつてゐるらしい縺れた糸の方へ握り拳を出して見せたりするのを矢張し自分の義務だと心得てゐる。——それもいゝ。私たちは此の取り扱ひ方を諳んじてゐ

る。この年とつた女に我慢がしきれなくなつたら、私たちだつても同じことだ。眠さうなクリザンテエムは續けさまに出て來る猫のやうな小さな欠伸に當てられて居る。それを彼女はわざ〳〵手で隱さうともしない。そしてあくびは引つ切りなしに出て來る。彼女は私たちが今夜この夜更に大雨の中をこれから上つて行かねばならぬ險しい坂道の事を考

へていやに氣の進まぬ顏附をしてゐる。

私とても同じことである。隨分厭き〳〵もしてゐる。そして何の目的があつて、あゝ、毎晩私はあの郊外まで上つて行かねばならないのだらう？あの高臺の家に私を牽きつけるものは何んにもないのに。……

雨は次第にひどくなつて來る。私はどうしたらよからう？……外には威勢のいゝ車屋が掛け聲を出しながら、通行人に泥水をはねかけ、大雨の中に影を引く樣々な色をした彼等の提灯を差し出しながら駈けて行く。ムスメ達や年とつた女たちは着物の裾を端折り、泥にまみれて、彼女等の傘の下で一樣に笑ひさざめき、挨拶を云ひかはしながら、そして敷石の上を足駄を鳴しながら、過ぎて行く。市街は下駄の音と雨の音で一杯になつてゐる。

幸にも、私たちの憐むべき從弟の四一五號が通りかゝつて、私たちの困つてゐる樣子を見て立ちどまつて、私たちを困難から救ひ出す事を約束する。彼は

乘せてゐる英吉利人を波止場まで送り屆けたら直ぐ、私たちの窮狀に必要なものを皆んな持つて來て私たちを助けてくれるだらう。

とう〳〵私たちの提灯は天井から取りはづされて、火をともされて、金を拂はれる。向側にも私たちが毎晩寄つて行く今一つの店がある。それは菓子屋のマダアム・ルウウル〔時さんの原文の註〕の家である。私たちは道々食べながら行けるやうに何時も其處で仕入れをする。――この菓子屋のかみさんは非常に生き〳〵した快活な女で、いつも私たちに愛嬌を振りまく。彼女は小さい花で飾られた菓子のうづ高く重つた後ろに屏風の繪のやうな恰好をして坐つて居る。私たちは待つ間を彼女の屋根の下で雨宿りする事にしよう。――そして樋から烈しく落ちてゐる雨水を避けるために、私たちは細い生き〳〵した糸杉の枝の上に非常に美術的に飾られた白や赤の餅菓子の陳列棚に出來る丈け身體を寄せて居る事にしよう。

憐むべき四一五號は私たちにとつて何といふ天惠であらう！――彼はもう遣つて來て居る。常に微笑を湛へ常に駈け廻つてゐる此の偉い從弟は。その時雨水は彼の丸出しになつた美しい兩方の腕の上を小川のやうに流れて居る。

彼は矢張り私たちの遠い親類になる瀨戸物屋で借りて來た二本の雨傘を私たちに持つて來て居る。イイヴは、私と同樣、今の今まで斯んなものを使はうとは思つて居なかつた。けれどもおどけて居るものだから、彼はそれを受け取る。勿論紙で出來てゐる。周り一圓の輪となつて、鶴のきまつた飛び方を幾つも散らして、蠟やゴムを引いた、襞の澤山ついたものなのである。

クリザンテエムは猫みたいな樣子で益々欠伸をしながら手を引いて行つて貰ひたさに甘つたれて、私の腕を取らうとする。

――ムスメ、今夜だけはこの役目はどうかイイヴ・サンにやつて貰つてくれ。その方が全く私たち三人の爲めにいゝんだから。

さあ其處で、全く小さな彼女が、この大男に凭りかゝる事になる。そして彼等は登つて行く。私は提灯をさげて先に立つて道を照す。そして私は私の奇怪な雨傘の下で後生大事に提灯の火を蔽つて居る。

道の兩側には瀧の流れるやうな音が聞える。山から落ちて來る皆んなこの暴雨の水なのである。今宵は歩行が困難で滑り易くて、道が遠いやうに思はれる。幾ら歩いても果てしがない。だん〳〵に積み重ねられたやうな庭や家屋、廣々とした地面。暗がりの中で私たちの頭の上で搖れてゐる樹木。

まあ長崎が私たちと一緒に登つて行くとでも云はうか。――併し彼方の、遙か遠くに、暗い大空の下に光つて見える蒸氣のやうなものゝ中に長崎はある。そしてその町からは人聲や太鼓の音や銅鑼の音や笑ひ聲なぞの入り亂れた雜音が立ち止つて來る。

この夏の雨はまだ全く大氣を爽快にし盡しはしなかつた。あらしのいきれで

この郊外の小さい家々は馬小屋のやうに開け放たれたまゝになつてゐる。そして其處で何をして居るかもあり〳〵と見える。燈明はいつも佛壇や神棚の前にともされてゐる。——けれども善良な日本人はもうすつかり寢んで居る。綠青色の紗のおきまりの蚊帳の中に、彼等が枕を並べて家族同志で横はつてゐるのを透し見る事が出來る。彼等は寢て居る。蚊を追つたり團扇を使つたりしながら。日本の男、日本の女、その兩親の傍に居る子供たち、皆んな若いものも年寄りも濃い印度藍の寢衣を着てぼんのくぼを小さい木の枕に安めて居る。

たまにはまだ遊んでゐる家もある。薄暗い庭の上の方からほのかに三味線の音が私たちに聞えて來る。了解の出來にくい音律で何かの踊りを踊つて居るその陽氣さが物悲しい。

竹叢で圍まれた井戸の處まで來る。その側で私たちはクリザンテエムに息を

つかせる爲めにくらやみの中で一と休みするきまりになつて居る。イイヴは其の場所をよく見る爲め、提灯の赤い灯を前へ差し出してくれと私に賴む。これが私達の半分道來たしるしになつて居る。

そしてとう〳〵、とう〳〵、私たちの宿までたどり着いた！——門がしまつてゐる。深い暗闇と沈默。私たちの雨戸は佐藤さんとお梅さんの心遣ひですつかり締め切られてある。雨は私たちの黝んだ古壁の板張りの上を小川のやうに流れて居る。

斯う云ふ時に、坂道傳ひにイイヴを歸して此の上海岸をうろついて貸艀舟を探させるなんてことは不可能な事である。否、彼は今夜は船へ歸るに及ばない。私たちは彼を私たちの處で寢ませてやらう。それに私たちの借入條件の範圍内で、彼の小さい部屋は間に合つてゐる。私たちは早速彼の部屋をこさへてやらう。——遠慮から、辭退するなぞには構はないで。私たちははひる事にしよう。

靴を抜いで、夕立に遭つた數疋の猫のやうに、身體を振つて、そして私たちの部屋へ上らう。

佛陀の前には小さい燈明がともつて居る。部屋の眞ん中には暗青色の蚊帳が吊られてある。着いた時の、最初の印象はいゝ。今宵はこの住居がなつかしい。この沈默と夜更けとが、眞に神祕な光景を齎してゐる。それに又、斯うした時には何時だつて家に歸るのはいゝものだ。……

さあ、急いでイイヴの部屋をこさへてやらう。クリザンテエムは彼女の大仲よしの友だちを彼女の側に寢ませやうと云ふので趣向を凝し、全力を盡してゐる。それに全力を盡すと云つても三四の襖を立て切りさへすればいゝので、直ぐと別に一つの部屋、即ち大きな函の中の區劃のやうなものが出來上る。其處に私たちが泊る事になる。——私はこれ等の襖はすつかり白だと思つて居た。ところが然うぢやない！　どの襖の上にも二羽の鶴が居る。——日本美術の提

供するきまり切つた筆致で灰色に描かれてある。一羽は頭を擡げて物々しく片足を上げて居り、今一羽の方は身體を搔いてゐる。おゝ！　これ等の鶴。……一月も日本に居たら飽き〳〵して了ふ鶴。

今、イイヴは寢床にはひつて私たちの屋根の下で眠つて居る。

睡氣が今夜は私自身よりも早く彼に來た。と云ふのは、私は、クリザンテエムから彼へ、彼からクリザンテエムへと長い諦視が交はされたのを信じたからである。

私はこのおもちやのやうな小さな女を彼の手に任かせてある。そして今になつて或る煩ひを彼の頭の中へ投げ入れて了つたと云ふ心配が私に起つて來る。この日本の女に就いては、私は何んにも別に氣に掛けちや居ない。けれどイイヴは、……彼としてはいゝ事ではないだらう。そして彼に對する私の信任に大

障害を來すであらう。……

私たちの古い屋根に落ちる雨の音が聞えて來る。蟬は沈默して居る。濕つた大地の香氣は庭からも山々からも薫つて來る。私は今夜はこの住家の中にあつて恐ろしくくさ〳〵して居る。小さい煙管の音も習慣になつてゐる以上に私を腹立たせる。そして、クリザンテエムが煙草盆の前に蹲る時には、私は最も惡い意味に於ける peuple〔下司〕な風を彼女に見る。

私は彼女を憎まねばなるまい、私のムスメを。若しも彼女が私のイイヴをそのかして、私がもう多分彼女に許して置かれないやうな或る惡い行をさせるやうにして居たのなら。……

三十

八月十二日。

Y***とシク・サンの夫婦は昨日離婚した。——シャルル・N***とカンパニュウル〔おかねさん〕の家庭は非常にわるくなつて來てゐる。彼等はあの鼠色の服を着た、物を探し歩くやうな、搾り取つて行くやうな、我慢のしきれない小さな人間どもと面倒なことを惹起した。その小さな人間どもと云ふのは警官どもである。警官どもは彼等の家主を脅かして、彼等を彼等の家から逐ひ出させたのである。(この國民の阿諛的な友情の下には、歐羅巴から來て居る我々に對して憎しみの古い根ざしがこだはつて居るのである。)だから彼等の義母の禮遇を受けねばならない彼等には、可成り困難な地位が其處にある譯である。——それから又シャルル・N***は間違つた信念を懷いて居る。併しもはや今更幻影を作る可き餘地はないのである。即ち勘五郎さんが私たちに周旋したこれ等の配偶者は、若し斯う云ひ得るならば demi-jeunes filles〔半處女〕であつて、彼女

等の生涯に於てこれまで既に一つの、或はまあ二つの一寸した戀物語を持つたことのある小さい女達である。だから、少し位は不信用に扱はれるのも隨分無理からぬ事である。……

Z***とトウキ・サン〔時さん〕との家庭は云ひ爭ひばかりして居て餘り旨くも行つてない。

私の處はどちらかと云ふと體面を保つて居る、少からず厭氣は差してゐるけれど。離婚しようと云ふ考へも私に屢々起つた。併し私はこの恥辱をクリザンテエムに加へる丈けの相當な理由を殆んど知つて居ない。それに殊に私を思ひ止まらせた事が一つある。私にも亦官憲との面倒が持ち上つた。

一昨日、びつくらした佐藤さんと、氣絶しさうなお梅さんと、涙にぬれたオユキ・サンが息せき切つて私の處へ上つて來た。日本の巡査が彼等の處へ來て、歐羅巴人の居留地以外で斯うした日本の女と不法結婚をして居る一佛蘭西人に

家を貸して居る事をひどく脅して行つたのである。——そして彼女等は告發されるのを怖れて居るのであつた。様々に言ひ譯をしながら、辭令を低くして私に出てくれるやうにと懇願した。

で、その翌日、私よりもずつとよく話しのできるあの法外もなく脊の高い友達と連れ立つて、私は戸籍役場へ行つた。非常な激論を闘はす意氣組で。

禮讓に篤いこの國民の言葉には、罵詈の言語が全く缺けて居る。非常に怒つた時でも、目下の者に向つて云つたり、卑しい生れの人間どもが親しい間柄で使ふお前といふ言葉ぐらゐで滿足しなければならない。私は結婚屆の時のテエブルに向つて腰をかけ、狼狽してゐるすべての小役人どもの中に立つて、次のやうな言葉で討論した。

——お前たちがおれの今住まつてゐる郊外に此のまゝおれを氣樂にさせて置くためには、どの位酒錢を出したらいゝといふのだ？　町の門番どもよりもけ

ちなちび共の分をくるめて、幾ら出せばいゝと云ふんだ？

大きな無言の謗り、沈默の驚き、腹立たしげな畏敬。

——無論それは。　彼等が遂に云ふ。　私の尊敬するお方をば氣樂におさせ申さねばなりません。皆んなこれ以上の望みは別に有つてないのです。たゞ併し斯うなると私が此の國の法律に從ふために私は宣言しなければならないことになるだらう、私の名前とあの若い女の名前を。私の……してゐるあの若い女の名前を。……

——おう！　ひとを馬鹿にしてる、實際！　おれは特別用務を帶びて此處へ來てからまだ三週間とたちはしないんだぞ、此のやくざ者ども！

そこで私は自分で登記簿を取つて、それをめくりながら、その頁と、私の署名とそれから、傍にクリザンテエムの書いた小さなあいまいな文字を見出す。

——さあどうだ、間拔ものども、見ろ！　一人の上官が不意に現はれて——

それは黑い上衣を着た小さな怪異な老人であるが——その座席から此の光景を見物してゐた。

——どうしたんだ？　何事が始まつたんだ？　佛蘭西の士官にどんな侮辱を加へたといふんだ？

私は前よりは丁寧に此人に私の事件を語る。彼は云ひわけと誓言をごつちやにして話す。すべての小つぽけな書記たちは四つん這ひになつて床の上に平伏する。そして私たちは出て行く。威嚴を保ちながら冷然と。お辭儀も返さないで。

佐藤さんとお梅さんは安心してゐられる。もう彼等を心配させるものはあるまい。

三十一

八月二十三日。

ラ・トリオンファントが船渠にはいつてゐるのと、私たちの居る處が町から遠いと云ふ事が二三日來もうクリザンテエムに逢ひに十善寺へ行かない口實になつて居る。

併しこの船渠の中にあつては皆んな飽き〳〵して居る。明け方から小さな日本の勞働者の一隊が、吾々の佛蘭西の造兵廠の職工共のやうに籠や水筒に入れた晝食を持つて私たちの處へ侵入して來る。併し何處となく困窮した痛ましい風をして、鼠を想ひ起させるやうなこせ〳〵した樣子をして居る。彼等は最初は音もなく入り込み、巧にもぐり込む。そして暫くすると龍骨の上にも、船槽

の底にも、窖の中にも、到る處に鋸を以て挽き割つたり、釘を打ちつけたり、修復したりしてゐる彼等を見出す。

岩石やもつれた繁みの傾斜を受けたこの場所ではひどい暑さを感じる。

二時と云ふ日ざかりに、私たちの處へやつて來る珍らしい愉快な襲撃。それは甲蟲と蝶々である。

扇で煽がれたやうに飛び廻る不思議な蝶々。その中には眞黑いのまで居て、それが目の眩んだやうに私たちに打つ附かる。その輕快と云つたら、胴體がなくて、大きな翼だけが一緒にくつ附き合つて震へてゐるやうだ。

イイヴは驚ろいて、それを眺める。

——おゝ！　彼は子供らしい樣子をして云ふ。　今素敵に大きな奴を二疋見ましたよ。……びつくらしちやつた。てつきり此奴は……蝙蝠が打つ突かつて來たのかと思ひました。

非常に珍らしいのを一疋捕へた舵手は、押花でもする時のやうに彼の信號簿の中へ入れて乾す爲めに、大事さうにそれを持つて行く。

通りがゝりの一人の水夫が、飯盒の中へ不味さうな炙肉を入れて持つて來ながら、おどけた眼つきで彼を眺める。

――僕に其奴はくれてしまつた方がよからうぜ、ねえ君。……僕が料理してやらう。

三十二

八月二十四日。

私が私の小さな家とクリザンテエムを捨てゝ來てから、やがて五日になる。

昨日から大風と豪雨。(過ぎ行かんとする或は過ぎ行きつゝある颶風。)中檣を

取りはづしたり下檣の帆架を引き下げたり、險惡な天候に際してのすべての處置をつける爲め、私たちは夜中に大騒ぎをした。もう蝶々が飛んで來どころぢやない。私たちの頭の上ではすべてのものがはためき呻く。蔽ひかぶさつてゐるやうな山の障壁の上では、木が怒つて打ち合つたり、草が倒れたりして、苦悶の有樣である。恐ろしい烈風が鳴りひゞく音を立てゝそれを吹きまくる。雨のやうに、私たちの上に、木の枝や、竹の葉や土くれが降り灑ぐ。

そして、可愛らしい小さな物から出來て居るこの國にあつては、この暴風雨は調子外れである。その勢が餘りに誇大で、その音樂が餘りに大き過ぎるやうだ。

夕方になると、驟雨は短かくなり、急に點滴となり、急に小止みとなり、大きな黑雲は見る間に捲かつて行く。――この時私は私たちの上の方の山の中へ

散歩に出かける。雨にぬれた草を分けて。——山へつゞく小徑が椿と竹の藪の間につゞいて居る。

……一しきりの夕立をやり過すため、私は山の中腹にある、大きな枝を張つた幾百年の老木の森の中に荒れさらされてある或る非常に古い寺の中庭で雨宿りをする。其處へは、古代ケルト族の大石門のやうに腐蝕した不思議な山門を潜つて、花崗石の階段を登つて行くやうになつて居る。この中庭でも矢張り樹木は侵害されて居る。日光は覆物をされたやうに緣がゝつて居る。雨は此處では木の葉や、根こそぎになつた苔と雜つて瀧のやうに降つて來る。不思議な恰好をした花崗石の古い怪像が隅々に据ゑ附けられてある。そしてそれが微笑を湛へた獰惡な顰め顏をして居る。呻き訴ふるやうな風のこの音樂の中で、雲や木の枝の密閉したこの暗さの下で、身の毛をよだゝせるやうな怪像の形相は名狀し難い神祕を語つてゐる。

これ等すべての昔の寺院を設計し、到る處に寺院を建て、人里離れた最も寂びしい片田舍に至るまでも寺院を以て充たした夫の日本人と、今日の日本人とは似てもつかぬものである。

一時間の後、この颶風の日の黃昏の中を同じ山つゞきで、樫に似た木立の下へと偶然が私を導く。これ等の木は常にこの風によつて歪められるのである。そしてその根もとに生えた草むらはしどろもどろに地びたにひれ伏し、裏返しになつてのた打つてゐる。……そこで、不意に私は森林に於ける大風の私の最初の印象をはつきりと思ひ出す。——サントンヂュの、リモアアズの森の中で、もうかれこれ二十八年前の、私の幼年時代の或る三月の月であつた。

山野に於て初めて私の出遭つたその風は、地球の他の半面の上を吹いてゐた。

——そして足速やな歲月はこの想ひ出の上を過ぎ去つてしまつた。——そし

てそれ以來、私の生涯の最も美しい時は滅びてしまつた。……

私は餘りに屢々私の幼時の回想に耽る。實際私はその繰りごとばかし云つてゐる。けれども私はその時代に於てのみ印象や感覺を持つて居たやうな氣がする。その頃私の見たり聞いたりしてゐたものは極く些細な事まで、測り知る可からざる極限のない奥深さの底にあつた。たとへばそれは目醒された心像か、前世の生存の回想であるかのやうであつた。若くば來世の生存の豫覺か、夢の國に於ける未來の降誕でゞもあるやうであつた。それから又有らゆる種類の驚異の期待——それは地球と人生とが疑ひもなく後々の爲めに、私の大きくなつた時の爲めに、とつて置いてくれた期待——のやうでもあつた。さて私は成長した。そして私の道程には、ぼんやり豫見して居たすべて此等の物が何んにもありはしなかつた。反對に、私の周りにあるものは少しづゝ狹まつて來た。不明になつて來た。追憶は塗抹されてしまつた。前方にあつた天涯は徐々に再び

閉されて、灰色のくら闇に充たされてしまつた。やがては永遠の塵埃に歸る可き時が來るであらう。そして私は私の幼時のこれ等すべての曖氣樓の神秘な理由を了解する事なしにこの世を去るであらう。私は永遠に見出す事の出來ない鄉國が如何なるものであるかを知り得ない心殘り、熱心に希求しても曾て抱擁した事のない人間が如何なるものであるかをば知り得ない心殘りを懷いて此の世を終るであらう。……

三十三

佐藤さんはさまゞに容態ぶつて、文那墨を含ませた華奢な筆先で美しい紙の上に綺麗な鶴を二羽描いて、彼自身の形見として、どく心安立てな風でそれを私にくれた。それは今私の船室にある。そしてそれを見る度に、私は、すら

すらと手を上げていかにも易々と描いてゐる佐藤さんを再び見るやうな氣がする。

佐藤さんの墨を溶かす皿はそれ自身が本統の寶石である。硬玉の石塊に細工されたこの皿は、rocaille〔岩窟の形に彫られた什器、ルイ十五世時代に流行した〕のやうに穿られた縁と硯海とから出來てゐる。そしてこの縁の上には同じ硬玉で出來た小さな親蟇が、佐藤さんの大事にして居る墨汁の數滴の湛へられた小さな湖に飛び込んで浴みでもしようと云ふ恰好でとまつてゐる。そしてこの親蟇はやはり硬玉で出來た四足の子蟇を連れてゐる。一つはその親蟇の頭の上にとまり、他の三つは親蟇の腹の下で遊んで居る。

佐藤さんは彼の生涯の間に澤山の鶴を描いた。從つて彼は實に群れや番ひを現はすことに於て卓越して居る。恰かもこの種の鳥類は斯んな風に表現されるべきものだといふやうに。この畫題を斯んなに早く、斯んなに優美に釋き明か

す才能を持た日本人は稀れである。卽ち初めに二本の嘴が描かれる。それから脚、その次ぎに脊中、翼、ぽつ、ぽつ、ぽつ。——頗る愉快に構へた手に握られた彼の巧妙な繪筆の一筆づゝの十數筆。——そして描き上げられる。そして常に成功を齎すのである！

勘五郎さんは、その事には別に非難す可き點を見出さずに、この才能は昔佐藤さんが大いに

努力した結果である事を語る。私には斯うも思はれる、お梅さんが、……まあ、何んと云つたらいゝだらう。……それに誰が彼女の事をさうと推量し得よう。あのやうに信心深く、あのやうに落ちついた、几帳面に眉毛を落してゐる老婦人を見て。……けれども實は、お梅さんは昔澤山客を取つて居たらしい。——何時も獨りぼつちで來る客である。——そして其處に考ふ可き餘地が十分ある。……——だから、お梅さんが一人の來客をもてなして居る時に若し新しい客が來合せたら、彼女の如才ない亭主はその新しい客を待たせて、應接間に囚虜にして引きとめて置く爲めに、早速いろ〳〵の變つた姿勢の鶴を描いて見せて居たのであつた。

これ故に長崎では、或る年頃の紳士たちは皆んな彼等の collections の中に佐藤さんの纖細な獨特な技能に負ふところのある二三枚の繪を持つてゐる。

三十四

日曜日。八月二十五日。

夕方六時頃、私の當番の間、ラ・トリオンファントは山の間に切り込んだ圍壁を離れ、船渠から出る。運轉の大騒ぎがあつて、それから私たちは十善寺の丘の下の、もとの位地に來て錨を下ろす。一點の雲もとゞめない、靜かな天氣に再びもどる。颶風の拭ひ去つてくれた空にはこの特別な晴明がある。未だ曾て見た事もない遠方のごく微細なものまでが見分けられるやうな極端な透明さがある。恰度恐ろしい大きな一と吹きが宇宙にさまよつて居る最も輕小な雲霧に至るまでも運び去つてしまつたかのやうに、到る處深い明るい空虛しか置かずに。そして、この雨の後、樹木や山々の緣の色は優れた春のやうな景色を呈し、

再び生き〳〵して來た。――新しく洗ひ出された繪畫の色調を、露を帶んだ光彩で研き出しでもしたやうに。三日今來避難して居た艀舟や和船は沖の方へと出て行く。灣はそれ等の白帆で覆はれる。まるで住み替へする海鳥の移住民が飛んで行くやうである。

夜の、八時に、運轉を終つて、私はイイヴと一しよに艀舟に乘る。私を引つ張り出したのは今度は彼である。彼は私を私の宿へ連れて行かうとするのである。

陸には、濕つた牧草の香氣がたゞよつて居る。山の道は、明月の光を浴びてゐる。私たちはクリザンテエムに逢ふ爲めに眞直ぐに十善寺へと上つて行く。素振りにこそ出さないが、私は彼女に就いては今まで長い間打つちやつて置いた悔恨の思をさへ抱いてゐるのである。

仰いで、私はあの高い處にある私の小さい家を遠くから認める。その小さい家はすつかり開け放たれて照り輝いてゐる。そして三味線の音が聞える。天井から下つた二つの燈明の小さく輝く明りの間に、あの佛陀の黃金の頭も瞥見する事が出來る。それからクリザンテエムが緣側に現はれる。實に日本人らしい横顏をして、髮を美しく結び、袂を長く垂れて、私たちを待つてゞも居るやうに肱をもたせかけてゐる。

私がはいつて行くと、彼女は出て來て私を抱擁する。少しく躊躇した風で。でも、やさしく。オユキも兩腕で私に絡み附く。これはもつと無遠慮に。そして私は不快を感ぜずに、殆んどその存在すら忘れて居たこの日本の住家を再び見る。

この家が未だ私のものであるのを見ては私は怪現な感じにさへ打たれる。クリザンテエムは私たちの花瓶に新しい花を活けてあつた。彼女は私の歸つて來

たのを祝ふやうに、髪を大きく結ひ、彼女の一番いゝ着物を着て、ランプを明るくしてあつた。ラ・トリオンファントが船渠から出るのを縁側から見て、彼女は私が遂に歸つて來るのを一心に念じてゐた。そして、仕度を整へて待つ間の所在なさを彼女はオユキを相手に三味線の連彈をして居たのである。疑ふ事も叱る事もありはしなかつた。まるであべこべである。

——私たちにだつて分つてゝよ。　彼女が云ふ。　あんなひどいお天氣に艀舟で長いこと入江を横ぎつて入らつしやれやうなんて。どうして。……

彼女は嬉れしがつてゐる小娘のやうにほゝゑむ。そしてほんとうに今宵彼女が可愛いくある事を承認しないなんて事がどうして出來よう。

さあ、私たちはこれから直ぐと長崎へ下りて行つて大散歩をしようと私が云ひ出す。私たちはオユキ・サンと、其處に居合せるクリザンテエムの二人の從弟と、それから喜んで行かうといふなら近所の娘たちもつれて行かう。私たちは

一番道化たおもちやを買はう。有らゆる種類の菓子を食べて見よう。そしてうんと樂しまう。

——まあいゝ時に來合せた！　彼女等が小躍りしながらいふ。　なんていゝ所へ來たんでせう！

丁度 Tortue Sauteuse〔踊る亀の意〕の大きな殿堂〔八坂さま？ 八坂神社と清水寺と並んでゐる祭典も八月に前後して行はれる〕で夜のお詣りがある！　町中のおとこ女が其處へ行くだらう。結婚してる仲間も皆んな出かけて行く。X、Y、Z、トゥキサン〔時さん〕、カンパニキウル〔おかねさん〕、ヂォンキィユ〔お仙さん〕の一隊に、あの法圖もなく脊の高い友達も一緒になつて。それに彼女たち二人、可哀さうなクリザンテエムとオユキ・サンは大そう心配して家に居殘つてゐたのであつた。私たちが居なかつたし、それにお梅さんがおひるから眩暈と發作を起して苦しんでゐたから……

ムスメ達のお化粧は急いでしなければいけない。クリザンテエムはもう用意

が出來てゐる。オユキは大急ぎで鼠色の着物に着替へて、私に美しい帶――橙黃色の裏をつけた黑繻子の帶――のふくらんだ結び目を直ほしてくれと賴む。そして髪には可成り高く銀の簪を差す。私たちは小さい棒の先に提灯を點す。佐藤さんは彼の娘の爲めに禮を云ふ。限りなく禮を述べる。私たちを見送つて、戸口で四つん這ひになる。――そして私たちは隨分はしやいで出て行く。透明な甘つたるい夜の中へ。

實に町は、下の方に、大祭の動搖の中にある。往來は人で一ぱいになつてゐる。人群れが通り過ぎる。――嬉しがつた、氣まぐれな、のろ〳〵した、たとへやうもない滿潮のやうに。――皆な全く同じ方向へ、唯だ一つの目的地へと流れて行く。人群れからは大變な併し、輕快な喧囂が湧き起る。其處には笑聲と小聲で取り交はされる挨拶の言葉が漲つてゐる。提灯、また提灯。……私の生涯に、私は斯うまで澤山の、雜多な色をした、こんがらかつた、仰山な提灯

を見た事がない。

私たちも續く。この人波の中に漂流して居るやうに、この人波によつて引かれて行くやうに。その中には盛裝したすべての年頃の女の群れがゐる。取り分け數へきれない程大勢のムスメ達が花簪をさしたり、でなければ、オユキのやうに銀の簪をさしてゐる。小ぢんまりした顏附、小猫のやうな小さいくる〳〵した目、半開の唇の邊まで少し許り侵入して居る丸ぽちやな生白い頰。これ等の小さい日本の女たちは、子供らしい仕ぐさと、にこ〳〵するのとで何時も變らず可愛いらしい。男の方は、この國特有の長い着物を着て、いつもよりおめかしをして、小賢しい猿のきざな醜態を遺憾なく調へる爲めに、山高帽を皆んな冠つてゐる。彼等は手に木の枝や、時折りは根こそぎの灌木を持つて居る。その中へ、木の葉とまぜこぜに、小鬼や鳥の恰好をした最も怪異な提灯を皆んなぶらさげて居る。

私たちがこの寺の方向へ進むに連れて、往來は段々混雜になり騷々しくなる。今や家々に沿うて露臺の上に限りなく商品が陳列してある處まで來る。有らゆる色合のボン〳〵、おもちや、花の附いた枝、切り花、假面。假面が何より多い。假面のはひつた箱や車が其處にも此處にも列んでゐる。一番有りふれたのは dieu du riz〔稻の神〕に奉納す可き死人のやうな、口を尖らして長い耳を押つ立てゝ鋭い齒をむき出した、青白くて狡猾さうな白狐の假面である。神々や怪物を象徵した他の假面もある。眞物の髮毛や鬚を附けて、全部鉛色で、顏を顰めて、筋肉を引き吊つてゐる。皆んなが、子供までが、この恐ろしい假面を買つてその顏の上へくつ附ける。種々な樂器も賣られてゐる。その中には實に奇妙な音を立てる澤山な玻璃製の喇叭〔びんぼん？〕がある。今夜はそれが實に夥しい。少くとも二メエトル毎にそれを賣つてゐる。その喇叭の立てる音色は今まで聞いたものには似も附かぬ音色である。まるで群集の中で人を怖

氣立たせる爲めに啼き叫んでる大きな七面鳥の聲を聞くやうな思ひがする。

この國民の宗教的娯樂の中に、事物の持つて居る神祕の溢れた dessous〔祕密〕を見出すことは、私たちには到底不可能な事である。何處までゞ冗談が盡き何處から神祕的な恐怖が始つてゐるのか、私たちには見さかいが附かない。これ等の習慣、これ等の象徵、これ等の假面、傳說と遺傳とが日本人の頭腦の中に積み重ねたこれ等すべてのものは、私たちにとつては當ても附かない深い起源から來てゐる。最も古い書籍を漁つて見ても決して淺薄な薄弱な說明より外私たちに與へてはくれまい。——それは私たちが此の國民と共通したところを有つてゐないといふ理由である。私たちはなぜといふわけも知らずに私たちの陽氣と笑ひ聲とはまるで異なつた、彼等の陽氣と彼等の笑ひ聲の中を通つて行くのである。……

クリザンテエムはイイヴと。オユキは私と。私たちの從妹のフレエエズ〔苺(おいち)〕とジニア〔浦島草(おうら)〕と、これは私たちの監視の下に先に立つて歩いてゐる。斯ういふ順序で私たちは猶ほも群集のあとから、迷兒にならないやう仁手をつなぎ合せながらついて行く。

この殿堂へ行く往來には一體に、金持は彼等の家の内に植木鉢や活花を陳列して置く。この國の有らゆる住家の持つてる hangar〔四方あけつぱなし〕の形、その外國風な店先や緣臺の種類は華奢なものゝ斯うした展覽會には極めてふさわしくある。家はすつかり開け放しにして、家の内部には幕を張つて奥の方を隱くしてある。往來の群集から少し引込んだ處にある一般に白色を用ゐて居るこれ等の幕の前方に天井から下がつたランプの輝かしい光りの中に、陳列品が規則正しく並べられてある。——これ等の活花の中には花を附けたのは殆んどない。葉許りである。——或るものはたよ〳〵しい、珍しい、一寸そこいら

では見當らないやうなものである。——でなければごく有り觸れたものゝ中から故らに選び出したもので、何等かの新しさと優れた處を見せる技術を以て整理されたものである　有りふれた蒿苣の葉やよく育つた大きな玉菜を以て微妙な技巧的な恰好をつけて、奇異な花瓶の中へ挿したものである。花瓶はすべて青銅で出來てゐる。併しその圖按は、尤も變化に富む想像力を働かせて、限りなく變つたものである。或るものには複雜と苦心の跡が窺はれる。又あるものは、大部分はさうであるが、輕い簡單なものである。——だが併し實に研究されたる簡單さを持つたものであつて、私たちの目には、未知の技術の天啓の如く、また形の上に求められたすべての總念の轉覆であるが如くにも見える。……

往來の或る曲り角で、私たちは非常に運のよい出逢ひをする。それはラ・トリ

オンファントの結婚してる私たちの仲間と、ヂ・ンキイユ〔お仙さん〕とトゥキ・サン〔時さん〕とカンパニュウル〔おかねさん〕である！ ——ムスメたち同士で、お辭儀と挨拶。お互ひ同士めぐり逢つた喜びのことば。それから、密集した一とかたまりになつて、私たちはいつまでも増しつのる群集に引きずられながら寺の方へ歩きつゞける。

往來は上り坂となる。（殿堂はいつでも高い所に在るから。）そして、次第に私たちが上るにつれて、提灯や着物の夢のやうな美觀に更に今一つの、遠い、青味がゝつた、煙のやうな美觀が加はる。全長崎が、その塔と、山々と、月の光を一ぱいに浴びてゐるその靜かな海と一しよになつて、今や私たちと同時に空の中へせり上りつゝある。徐ろに、若し斯うも云ひ得るなら一歩づゝ、その美觀はあたり一面に浮き上つて來るのである。赤い灯や有らゆる色の流れのはためく此れ等すべての前景を、一つの大きな透明な裝飾畫に引き展ばしながら。

私たちは勿論近づきつゝある。此の邊にはもう大きな花崗石や、石段や、樓門や、怪像なぞがある。私たちはこれから幾つながりとなくある段々を上らねばならぬ。私たちと一しよに上つて行く信者たちの波に殆んど運ばれるやうになつて。

殿堂の中庭に、——私たちはやつとのことで着く。

これが今宵の夢のやうな美觀の最後のそして最も驚く可き畫面である。——輝いてそして奥深い畫面。それは月に照された夢のやうな遠景を持つてゐて、そして上の方には巨人のやうな樹木や神々しい杉の木が、その黑い枝葉を圓塔のやうに擴げてゐる。

私たちは其處へ、私たちのムスメ達と一緒に、皆んなして坐り込む。この中庭に急拵へした澤山な小さな茶屋の中の或る一軒の、花で飾り立てられた日覆

の下へ。私たちの居るのは大きな石段を上つた或る臺地の上であつて、その石段からは群集が引つ切りなしに溢れ込んでゐる。私たちの居るのは或る樓門の下であつて、その樓門は巨像の重々しい堅苦しさを以つて夜の空の中へ突つ立つてゐる。また私たちの居るのは或る怪像の下であつて、その怪像は彼れの大きな石の目と、彼れの意地わるさうな顰め面と彼れの笑ひを以つて私たちを見下してゐる。

此の樓門と此の怪像は、此の祭りの不思議な裝飾畫の中で、前景の二つの大きな威壓的な物である。此の二つは少しく眩惑を感ぜしめる豪壯を以つて、遠方の、空中の、空虛の、彼方茫漠として灰色がゝつた青色のすべての物に面して聳えてゐる。此の樓門と怪像の後方に、長崎はさまゞくな色の小さな火影の數千萬と共に、透明な暗がりの中に非常にかすかに描き出されて、一と筋に展がつてゐる。それから山々はそのいかめしい齒形に列んだ輪廓を星で一ぱいに

なつた空の上に描き出してゐる。——青い上にも青く、透明な上にも透明に。そして灣の片隅も見えてゐる。非常に高く、非常にぼんやりと、非常に青白く、たとへば雲の中に浮んだ湖のやうに。その水は、それを銀の布の如く照してゐる月の光の反射に、僅かにそれと知られる位に。

私たちの周りには絶えず玻璃の長い喇叭が鳴つて居る。映し繪の幽靈のやうに、禮讓に厚いそして輕佻な人間の群れが往來して居る。小さい眼をしたムスメ達の無邪氣な群れは譯もなく輕快に笑ひつれて、銀の簪を挿した美しい髪毛を光らして居る。それから非常に醜い男共は枝の先に鳥や、神々や、蟲けらの形をした提灯をぶら下げてぞろ〳〵歩いて居る。

私たちの後に、殿堂は、すつかり飾火され、すつかり開け放たれ、坊主たちは神格、怪獸及び象徴の栖まつてゐる金光燦爛たる奥殿の中に不動の列を作つて坐つてゐる。群集は、笑聲と祈禱の單調な低い騷がしさの中に、手一杯に

賽錢を投げながら周りに寄りたかつて來る。絶え間なき騷音と共に錢は坊主たちの爲めに圍はれた圍の中の床の上に轉がる。其處へは銅貨や銀貨の洪水の後のやうに、種々な大さの賽錢が降り積つて、白い蓆の地がすつかりかくれてゐる。

私たちはこの祭の中にあつて祖國を離れた感慨に打たれて其處に立つて居る。眺め渡したり笑つたりしながら。何故と云つて、笑はなければならないから。そしてまだ十分會得しない國語で譯の分らぬ幼稚な事を云ひながら。何故だか私には分らないが、私たちが一樣にこの國の言葉を解しない事に今宵は思ひ惱んで。夜の微風は動いて居るけれど、私たちの日覆の下は大變暑い。私たちは香氣に充ちた霜、でなければ雪の中に花の味を附けたやうなものに似てゐる可笑しな小さい氷菓子を幾杯も飲む。私たちのムスメ達は雜に雜つた砂糖入りの豌豆をあつらへる。——三月の降雪の後に拾ひ集めでもしたやうな眞物の

雹に雜つたものである。

グルウ！……グルウ！……グルウ！……と玻璃の喇叭は徐かに音を立てる。力强いよく響く音を以て。でも亦いかにも辛さうに、そして水の中で窒息でもするやうに。至る處でがらぐを鳴して居る。拍子木を無性に叩いてゐる。わけの分らぬこの陽氣さの無限の興奮の中へ私たちも亦持つて行かれるやうな氣持がする。その陽氣さといふのは私たちに測定は出來かねるが、何だか妙に神祕な、子供つぽい、また恐ろしげなものが雜つて出來てゐる。私たちの後の寺の中にあるのを私たちが氣取つてゐるあの偶像のおかげで、混亂して聞えてくるあの祈禱の聲のおかげで、一種の宗教的恐怖心が傳播される。——殊に、時々通りすがりの人々の顏をかくしてゐる、漆塗りの木で出來た白狐の首のおかげで。——蒼白なあのすべての恐ろしい假面のおかげで。……

この殿堂の庭園と附屬地の中に一寸想像も附かない野師どもが店を列べてゐる。その白く文字を染め出した黑色の旗は大きな柄の先に、柩の裝飾物のやうに風に吹かれてはためいてゐる。私たちのムスメ達が彼女等の禮拜を終つて賽錢を投げてしまふと、私たちは一かたまりになつて其處まで歩いて行く。

この市の或る一つの板小屋の中に一人の男がたゞひとり登場して、テエブルの上に脊中をぺつたり附けて横はつてゐる。彼の腹部から殆んど人間大の人形が藪睨みの恐ろしい假面をつけて湧き出る。それが喋べつたり、身振りをしたりする。——それから空つぽの檻襤みたいになつて崩れる。と忽ちにぜんまい仕掛の伏せ籠のやうに新たにぬうつと出る。それ等が着物を變へ、顏を變へ、引續きの狂亂の中に狂奔する。一寸間を置いてそれが三つまで出る。と四つ同時に出る。これは寢て居る男の手足なのである。その兩足を空中に浮かせ、そして二本の腕にはめい〳〵着物を着せ、鬘をつけて假面をかぶせる。これ等の

化物の中に色々の場面や刀を持つた立ちまはりなぞが演ぜられる。

中にもぞつとさせる老女の人形がある。死骸のやうな哄笑を漏しながら彼女が髮を振り亂して現はれる度に、ランプは暗くされ、骨骨のきしむやうな思ひをさせる拍子木の刻震動音を以て囉方の音樂は非常に陰氣な呻くやうな笛の音になる。——明かにこの人物は一幕の中の醜怪な役を演ずる。彼女はきつと呪ふ可き貪慾な鬼婆な

のだらう。更らに彼女を恐しくするものは白い衝立の上にいつも適宜な明るさに映し出される彼女の影である。何んとも譯の分らない所作によつて本統の姿かと思はれるまで鬼婆のすべての動作につきまとふこの影は、狼の影なのである。——暫くすると鬼婆は振り返つて、彼女に捧げる飯椀を受取る爲め獅子鼻を斜に見せる。その時、衝立の上にはその尖つた二つの耳、獸面、唇、齒、漏れ出る言葉と共に、狼の横顏の引き伸ばされるのが見える。囃方は陰かにきしり出し、呻き、大どろ〳〵になる。——それから梟の合奏のやうに陰欝な叫び聲をどつとあげる。

そこで鬼婆が食ひだす。そして狼の影も亦食ひだす。顎骨を動して、今一つの……非常にはつきりした影を嚙る。それは赤ん坊の腕である。

私たちはその次ぎに日本の大きな螺鰤を見に行く。——それは此の群島國の

内海に忘られて殘つたノアの大洪水以前の標本でゞもあるやうに、この國に於ては稀らしい、そして寒い、遲鈍な、眠りこけたやうな、大陸へ行つても猶ほ知られてない動物である。

その次には、悧巧者の象を見る。私たちのムスメ達はそれを怖がる。それから輕業師。動物の見世物。……

私たちが十善寺の私たちの家へ歸り着いたのは午前の一時である。

先づ第一に、私たちは一晩既に泊つた事のある襖を立て廻したあの小さい部屋へイイヴを寢ませる。それから小さい煙管を丹念に用意した後で、私たち自身も寢む。そして煙草盆の緣へパン！ パン！ パン！ パン！

けれども今度はイイヴが眠りながら烈しく動き出してはね廻り、仕切りを足で蹴つたりひどい騷ぎをする。

一體どうしたと云ふんだ！……私は彼が狼の影をした鬼婆を夢に見て居る處

を想像する。――クリザンテエムは顔に驚きの色を現はして、耳を傾ける爲めに肱を立てゝ起き上る。……

忽ち、輝いた顔になる。彼女は彼を苦めてゐるものが呑み込めたのである。

――カ！（蚊！）彼女は云ふ。

そして彼女は自分の云はうとして居る動物がどんなものであるかをもつとはつきり私に分らせる爲めに、尖つた彼女の小さい爪の先でその通りの眞似をして見せて手痛く私の腕をつねる。誰でも刺された時に感ずるやうな、くすぐつたいやうな顰め顔をして。……

――おゝ！　まあ、この仰山なくだらない默劇はもう分つたよ、クリザンテエム！――私はカと云ふ言葉を知つてゐるんだよ。私にはよく解つてるよ。……

それが實に道化てすばしこく、小器用に唇を尖らしてされる。私は、心の底では少しも腹を立てやうなんて考への起らない位に。――けれども明日になつ

て見たら其處のとこに紫の痣が附いて居るだらう。それは確かである。

さあ、イイヴを救ふ用意をする爲めに私たちは起きなければなるまい。イイヴだつて、このまゝ何時までもどたりばたりして居る譯には行かない。提灯をつけて、如何してゐるのか、何をしでかしたのか、行つて見てやらう。

まちがひもなく蚊である。家の中の蚊も庭に居るのも、がんぐ群れ集つて來て、彼の周りを雲のやうに飛んで居る。腹を立てゝゐるクリザンテエムはその中の數疋を提灯の火で燃して、外の蚊を私に見せる。『うう！』襖の白い紙の上には、至る處にそれが止まつてゐる。

晝間の疲れで彼は眠りこけて居る。でも鬱陶しい眠りである。それが顔で分る。クリザンテエムは私たちの側へ、私たちの青蚊帳の中へ連れ込む爲めに、彼を搖り起す。

彼はされるまゝになつて居る。何かぶつくさ云つた後、彼は、まだよく目の

醒めきらない大きな子供のやうに起き上つて私たちについて來る。――そして私は、要するに私は、この三人で寢ることに就いては別に非難す可き點を見出さない。私たちの分たうとするその床は餘りにlit(寢床)らしくない。そして私たちは日本の習慣に從つて、常にするやうにすつかり着物を着たまゝ其處で眠るのである。旅中、汽車の中で、最も尊敬す可き夫人達が遲疑せずに斯樣にして知らない紳士達の側に横はらないであらうか?

私は監視したり、覗き見したりするためにクリザンテエムの小さい箱枕を蚊帳の眞中へ、私たちの二つの枕の間へ置いた。

その時彼女は頗る殊勝に、何も云はないで、不注意に私の犯したやり方の誤りを訂正でもするやうに、その枕を取り上げて、蛇の皮で出來た私の太皷枕と置き代へる。これで私が彼等の間を割つて眞中に這入る事になつた。この方が實際正しいのだ。おゝ! これでこそすつかりいゝ。――クリザンテエムはた

しなみのある婦人である。……

……その翌朝船へ歸る途中、七時の明るい太陽を受けて露の一杯置いた小徑を學校通ひの六歳から八歳位の全くcomiqueな小娘たちと一緒に歩く。

蟬は、云ふまでもなく、私たちの周りによく響く快活な聲を立てゝゐる。山は香氣を發してゐる。空氣は爽かに、光線は輝かしく、長い着物を着て、美しい髪飾をしたこれ等の小娘たちは無邪氣で快活である。私たちの踏む草花や牧草の心地よさ。そしてそれは露の雫を置いて居る。……田野の朝と生活の朝とは、日本に於ても同じやうに、何んと云ふ不滅の喜びであらう。……

その上また私はこれ等の日本の小さい子供の魅力を認める。彼等の中には崇拜し度いやうな兒が居る。――けれど、彼等の有つてるこの魅力が老耄れの顰め顏になり、笑顏を作つた醜さになり、猿のやうな恰好になる爲め、どうして

斯うも早く時は過ぎ行くのであらう？……

三十五

私の義母のマダアム・ルノンキュウル〔きんぽうげ（おきんさん）〕の小庭は、まさしく、私の世界巡遊の間に出逢つた最も陰鬱な眺めの一つである。

おゝ！　たよ〳〵しい光線を受けてゐるこの小庭の縁の處で小皿にはひつた胡椒入りの果物を食べながら、たあいもない雑談に過す遲々として物倦く、そしてうつら〳〵して居る時間！　町の眞ん中に、四壁に圍まれた四メエトル四方のこの公園は、小さい湖や、小山、さては小さい岩石までもしつらへてある。そして朽ちるに委かせた綠色や髭を出した苔が、曾て日光を見た事のないその全部を覆うてゐる。

けれども爭ふ可からざる天然の感情は此野趣ある景色の些細な縮寫に現はれてゐる。岩石は程よく置かれてある。キャベッ程の高さもない短い小さな杉は、その飾くれ立つた枝を、幾世紀も經て疲れた巨人のやうな態度で谷の上に擴げて居る。——そしてその大樹の立ずまひが人の目を欺き遠近を誤らせる。部屋の薄暗い奥から見頃の距離に居て、比較的光線を受けたこの景色を眺めると、果して人工で出來て居るのか、或は寧ろ、若しこれが狂つた眼で見た——それとも双眼鏡の惡い端から眺めた實際の山野の一部分でないとしたら病的な何かの幻影に惑はされて居るのぢやないかと怪まれる位である。

日本趣味に關して幾らかの智識を有つた人の目には、私の義母の室内は凝つたものである事が分る。全く無裝飾である。僅かに二三の小さい屏風が其處此處に置かれてある。——水さし、蓮を活けた花瓶、外には何にもない。木造の部分には繪畫もなけれは、漆塗りにもなつて居ないが、氣まぐれな思ひつきで

頗る纎細に細工された透彫りになつてゐる。そして石鹸水で屢々洗つてその新しい樅材の白さを保つて置く。屋體を支へてゐる木の柱は非常に心をこめた想像力で樣々な趣向を凝してある。或るものは全く精確な幾何學的の形をしてゐる。又或るものは葛を絡うた木の古幹のやうに人工的に歪めてある。小さい押入、小さい袋戸棚、小さい棚が白紙の羽目板の無垢な揃ひで、最も巧妙な最も思ひ設けぬ風に隱くされて、到る處にある。

私は美しい巴里の婦人達の處で見る、骨董品をごた〳〵に列べて置いて輒出品の繻子の上に金の不恰好な刺繍をしたのを張つた日本間を稱する客間を思ひ出すとひとりでに微笑まれる。私はこれ等の婦人達に、この國では趣味を解した人達の家がどんなものであるかを見に來るやうにと勸める。——江戸の御殿の物寂びた白さを見物に來るやうにと。——佛蘭西では、美術品をば慰む爲めに持ち、この國では godoun と呼んで、鐵で固めた、地下の、一種の神祕な部

屋の中にそれ〴〵符票をつけて藏つて置く爲めに持つて居る。たゞ稀な場合に、高貴の訪問者をもてなす爲めに、この測知し難い場所を開くのである。——綿密な、過度の清潔、白い疊、白い木造、總體が極度に簡潔である事、それから限りなく小さいこま〳〵したものゝ中に、信じ難い程の風雅の潜んで居る事、斯うした事が室内の贅澤を解する日本風なのである。

私の義母は實際私には非常によく見える。若し彼女の小庭が私に與へた感情が堪へ難いほど陰鬱なものでなかつたら、私は時々彼女を訪問しただらう。ヂヨンキイユ〔お仙さん〕やカンパニユウル〔おかねさん〕や、トッキ〔時〕のお母さん達と共通な點は少しもない。斯んな婦人たちのすべてよりは問題にならない程優れて居る。それから又人を魅する力も未だ殘つて居る。美しい嬌態も十分にある。——彼女の前半生は私には迷宮である。でも、私は婿である資格からして、禮儀上餘り立ち入つて尋ねる譯にも行かない。

昔江戸で名うての藝者だつたが、それから子持ちになるやうな輕はずみな事をし出來た爲めに、お客の最負を失つたのだと云ふものがある。それは彼女の娘の三味線にかけての才能がよく證據立てゝゐる。彼女は多分自身で娘にその Conservatoire〔音楽游藝の教養所〕の彈き方と作法を仕込んだのであらう。

クリザンテエム（彼女の長女であつて、名譽失墜の最初の原因）が出來てから私の義母は、腕は冴えてゐたけれど浮氣な性質から、同じ失錯に猶ほ七度びまでも陷つたのである。卽ち、私の小さい二人の義妹の雪さんと月さんと、私の小さい義弟の櫻、鳩、旋花、金及び竹を產んだのである。

この小さい竹は四つになる。輝かしい美しい眼をした、まる〳〵した、黃いろい兒で、愛くるしい快活な兒で、笑はない時はいつも眠つてゐる。私の日本の全家族の中で、私の一番好きなのがこの竹である。……

三十六

火曜日。八月二十七日。

私たちは、イイヴ、クリザンテエム、オユキと私で、足まめな四人の車夫にひかれて、ほこりだらけな薄暗い町の中をうろつきまはつて、骨董店で古物を搜しながら一日を過した。

日暮れ方になると、今朝ほどから私を倦き〳〵させてばかし居たクリザンテエムが、自分でも勿論それに氣がついてゐたと見えて、悲しさうな顏をして、病氣にかこつけて母のマダアム・ルノンキュウル（おきんさん）の處へ行つて、今夜は臥せり度いと云ひ出す。

私はそれに贊成する。行つてしまつた方がいゝ、斯んなムスメは！　オユキ

が彼女の兩親の所へ知らせに行くだらうから、その兩親が私たちの部屋を締めて呉れるだらう。私たちは、イイヴと私は、私たちの後にどのムスメも連れずに夕方を思ひのまゝ歩きまはらう。そして後で、私たちはラ・トリオンファントの私たちの所へ歸つて寢まう。あの高い所まで攀ぢ登る面倒も見ずに。

私たちは最初私たち二人ぎりで何處か小綺麗なお茶屋へ食事に行かうとして見た。——到底駄目である。何處へ行つても場所がない。障子のあるすべての部屋、襖の立てゝある小ぢんまりしたすべての部屋、小庭のあるすべての小部屋は、小さな食器を並べて食べてゐる日本の男や女で實に一杯になつてゐる。澤山な若い道樂者が意氣な集りをしてゐる。離れの小座敷では三味線の音がして踊り子が踊つて居る。

今日は丁度、私たちが一昨日その初日を見た、Tortue Sauteuse〔八坂さま？〕のお詣りの四日目の、最後の日である。——そして全長崎は今や遊樂に耽つて居る。

Papillons indescriptibles〔形容のできない蝶々〕といふお茶屋で、此處も滿員ではあるが、併し私たちは以前からなじみになつてゐるから、小さい泉水の上へ、金魚の池の上へ、間に合せの板敷を張つた處を想像して下さい。そして其處で、私たちの足の下でぷす〳〵云ひ續けてゐる噴水の心地よい涼しさの中で、私たちの食事が出るのである。

食事の後、私たちは信者達について行く。そして殿堂へ上つて行く。

其處へ登つて、此前と同じ妖精や同じ假面を見たり、同じ音樂を聞いたりする。一昨日のやうに私たちは何處かの日覆の下に坐つて、花の匂ひを入れた道化た小さい氷菓子を飲む。でも今夜は私たちはひとりぼつちである。併し祭を見に來て居る此の國民と私たちとの結び目ともいふべきあのなつかしい顏をし

たムスメ達の一隊の居ない事が、この不思議な逸樂の中で、これ等すべてのものから私たちを離れ〳〵にし、私たちを前よりも一層寂びしく感じさせる。いつ見ても下の方には青々した廣い裝飾畫がある。それは月に照された長崎が、宙に浮いてる霧のかけた幻影のやうな銀色の水面と共に見える景色である。又私たちの後には大きな開けつぱなしの殿堂があつて、其處では、坊主たちが、神聖な鈴を振つたり拍子木を叩いたりしてお勤めして居る。——私たちの居る處から見ると小さな人形のやうである。——或る者は靜かな木乃伊のやうに並んで蹲踞つて居る。また或る者は神々の鎭座してゐる金色づくめの奥の院の前を調子づいて歩いて居る。私たちは今宵は少しも笑はない。そして殆んど話しもしない。私たちは最初の晩よりも感に打たれてたゞ視つめてゐる。その意味を捜し求めながら。……

突然、イイヴが振り返つて云ふ。

——兄弟！……あなたのムスメが!!……

ほんとうに、彼女が、クリザンテエムが、イイヴの後ろに居た。殆ど地びたに這ふやうにして、花崗石で出來た半分虎、半分猫ともいふべき、私たちの撓み易い日覆の倚つかゝつて居る或る大きな獸の前足の間にかくれながら。

——小猫みたいに爪で私のズボンの裾の所を引つ張つた。非常に驚ろいていイイヴが云ふ。——おう！ いや全く小猫みたいだつた！

彼女は後生大事にひれ伏して身體を曲げたまゝで居る。彼女は惡くとられはしまいかと心配しながら、内氣にほゝゑむ。そして私の小さい義弟の竹の首も、同じやうにほゝゑみながら彼女の頭の上の方に擡げられてゐる。彼女は頭をくる〳〵坊主にして、長い着物を着て、絹の帶を大きく結んだ、大事な小ムスコの竹を、彼女の腰の上に跨らせて連れて來てゐるのである。そして彼等は

その氣まぐれな仕打を私たちがどう取るか、それを知らうとして、二人ながら私たちの顏を見て居る。

なに、私は彼等を惡く取らうなんて、そんなことはこれつぱかしも思つちや居ない。それどころか、反對に彼等の現はれたことが私を喜ばす。私はクリザンテエムが、斯んな風にして歸つて來たり、斯んな風に竹サンを祭に連れて來たりするのを大變可愛ゆく思ふ。たとひ可なり下司ばつたまねはして居ても。彼女は、實を云ふと、日本の貧しい女たちが彼等の子供を結ひつけるやうに、その子供を脊中に結ひ附けてゐるのである。……

さあ、彼女をイイヴと私の間に坐らせてやらう。彼女の大好きな霰づけの豌豆を食べさせてやらう。それから、その可愛らしい小さいムスコを私たちの膝の上に乘せて、彼の好きなだけ砂糖づけの糖菓を食べさせてやらう。

夜も更けて、私たちがこれから下りて歸らうといふ時になると、クリザンテエムは小さい竹を脊中へ馬乘りに乘せて、その重さで前こゞみに身體を曲げながら、Cendrillon〔鬼女〕のやうな下駄をつらさうに引きずつて、花崗石の段段と敷石の上を歩き出す。……ほんとうに、全く下司ばつた歩き方だ。併し下司ばつたと云ふ言葉の最上の意味に於てゞある。その中には私を不快にするものは少しもない。私はクリザンテエムが竹サンに對する愛情の純朴で且つ氣持よいことも亦見出すのである。

その上何人も日本人にこの特長のある事を拒むわけには行かない。即ち小さな子供を可愛がること。子供をあやしたり、笑はせたりする技量。子供の生涯の發端を樂しくする滑稽なおもちやを發明すること。髪を結つてやつたり身仕舞をしてやつたりして、子供の顏つきを出來るだけ愛らしくしてやる眞正の特質あること。これが此の國に於て私の好きな唯一のものである。即ち子供と、

そして、子供を理解する彼等の方法が。……

途中で、私たちはラ・トリオンファントの結婚してる友達に出逢ふと、彼等はこのムスコを連れてゐる私を見て大層驚いて、私の厄介な荷物をからかひながら聞く。

――もう君の息子が出來たのですか？

町へ下りて、私たちはクリザンテエムの母の處へ行く曲り角で、クリザンテエムに adieu〔さよなら〕を云はうとする。彼女は微笑しながら、もぢ〳〵して、もう治つたから丘の上の私たちの家へ歸り度いと云ひ出す。――それぢや、全くの話が、私の計畫に嵌らない事になる。……さればと云つて拒んだら氣まづい事になるだらう。仕方がない！　ムスコを彼の母の處へ送りとゞけて、それから私たちはお晴さんの家で新しい提灯を買つて火を點けて、骨の折れる坂

道を登ることにしよう。

ところが今一つ aventure が生じて來た。この小さい竹までが來たいと云ひ出した！　どうしても、私たちと一緒に連れて行つて呉れといふ。實に、常識のない話である。到底聞いてやるわけに行かないことである！……

けれども……今宵は祭の晩だといふのにこのムスコを泣かせる譯にも行かない。……さあ、私たちはマダアム・ルノンキュウル〔おきんさん〕に使をやつて知らせてやらう。この兒の事を彼女が心配するといけないから。そして私たちを見て嘲笑する十善寺の小徑を行く人間が一刻も早くなるやうに、暗い坂道の續く間私たちの脊中にこの兒を脊負ふ役目を交る〳〵引き受けやう。イイヴと私とで。……

そしてこの道をムスメ一人の手を引いて登ることさへ欲して居ない私が、今

現に、まだその上に、私の脊中には一人のムスコを脊負つて居る。……何といふ皮肉な運命だらう！

私たちの家では、私が豫想してゐた通りすつかり戸締りがして錠が下りてゐた。誰も私たちの歸つて來るのを待ち受けてゐた者はない。それで私たちは戸口ばたで大騒ぎをしなければならない。クリザンテエムは聲を限りに呼びはじめる。

——おゝゝ！　おうめ—さあ…あ…あ…あ…あん！（佛蘭西語で云ふと、Ohé! Madame Pru..u..u..u..ne!）

私は彼女の小さな聲に此のやうな音調があらうとは知らなかつた。眞夜中の暗い響き易い中を、彼女の長くあとを引く聲は、私に遠い地の果の追放の印象を與へるほど實に不思議な、實に意外な、實に奇妙な抑揚を有つてゐる。……

とう〳〵お梅さんが、寢ぼけたまゝで、非常に驚いて、私たちの爲めに戸を

開けに出て來る。紺色の端に白い鶴の幾つも飛びまはつてゐる大袈裟な木綿の turban（頭に捲きつ）みたいなもので夜のかぶりものをして現はれる。彼女は、花を描いた提灯の長い柄を指の先で持つて、怖る〳〵、私たちが人違ひでないかを調らべるために一人々々の顏をのぞき込む。——そして彼女は、憐むべき婦人は、私の脊負つて來た此のムスコに合點が行かないでゐる。……

三十七

はなのうち私の好んで聞いたのはクリザンテエムの三味線であつた。今では、彼女の唄もまた好きになりかけてゐる。

劇場的の風なぞは少しもなく、名人の鍛へあげた太い聲で唄ふのではない。反對に、彼女の、いつも非常に高い調子は、優しい、たよ〳〵しい、愁ひを帶

びた聲なのである。

彼女はよくオユキに、彼女の作つたものか、それとも彼女の頭へ浮んだものか、或るゆつたりした夢のやうな romance を敎へてやる。その時は二人とも私を驚かせる。彼等の音締めを合せた三味線の上にお互に相調子を探し合ひながら、少しでも彼女等の耳に音色が狂つて來ると、その度に彈き直して、それでゐて、決して調子の亂れにまごついたりすることなく、いつも間のわるい、奇體な、きまつて哀れつぽい諧調で彈きつゞけるのである。

私は大がい、彼女の音樂のつゞいてゐる間は、緣側に出て、莊麗なパノラマの前で書きものをして居る。私は或る一枚の萇蓙の上に坐つて、蟋蟀を浮彫にした日本の小さな寫字臺に凭つかゝりながら書きものをする。私の墨汁は支那出來である。私の墨汁入れは、家主のと同じやうに、緣に可愛らしい小墓と大墓を彫つた硬玉である。そして私は自分の感想を搔いつまんで書いて置く。——

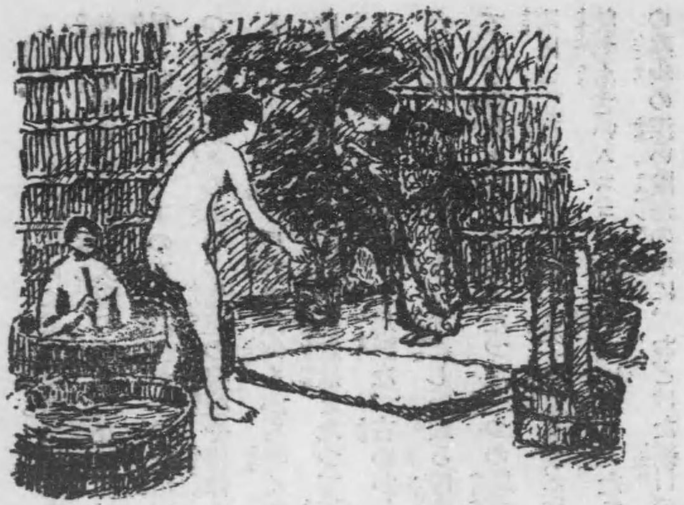
丁度、下で佐藤さんがしてるやうに！……時々私は自分が佐藤さんに似てるやうに想像することがある。そしてそれは私を可なり不快にする。……

私の感想……それは飛んでもない零細なことばかしから出來てゐて、色と形と匂と音の細まゝ〳〵しい記錄である。

併し小說の或る一つの imbroglio〔葛籐〕が私の單調な水平線に現はれ出やうとしてゐることは事實である。ムスメたちと蟬の此の小さい世界の眞ん中で縺れ合はうとしてゐる或る一つの intrigue〔情事〕が。イイヴの情人なるクリザンテエムが。クリザンテエムの情人なるイイヴが。私のオユキが。私が。……若し私たちが此國でない他の國に居るのであつたとしたら、兄弟同士殺し合ふやうな或る大きな戲曲になる事件が起つたかも知れない。併し私たちは日本に居るのである。そして氣の拔けた、せゝこましい、おどけた此の外界の影響で、全く其のやうなことは何んにも起らずに濟むであらう。

三十八

この長崎には、一日中の最も滑稽な或る時刻がある。それは夕方の五時か六時頃である。この時刻には人々が丸裸で居る。子供たちも、若い人たちも、年寄りたちも、年寄りの婦人たちも皆んなそれ〴〵盥の中に坐つて湯浴みして居る。それは少しの蔽ひ物もなく、所きらはず行はれるのである。庭の中でも、中庭の中でも、店の中でも、または門口でさへも構はずに。往來の此方側から向側へ隣同士で成るべく易々と話しの出來るやうに。此の狀態で人にも逢ふのである。躊躇することなく桶の中から出て來て、きまり切つた淺葱色の小さな手拭を手に持つたまゝ、來訪者を坐らせて、おもしろい相槌を打ちながら對手になるのである。



併し彼等は、ムスメたちは（年とつた婦人たちだつて）、斯んなに、りで出て來て些とも見つともよく有りはしない。日本の女は、長い着物と仰々しく結び立てた大きな帶を取つて了ふと、胴體のやうな足をした、細くて梨形の喉をした、小さな黃いろい人間に過ぎなくなる。彼女の小さな人工的の魅力は、着物と一緒にすつかり無くなつて了つて、何んにも殘らなくなる。

愉快でもあれば同時にまた憂鬱でもある一時間がある。それは夕映より少し後、空が黄いろい大天蓋のやうになつて、その中に山々や高い塔が劈き聳えて居る時である。下の方の灰色がゝつた小さい町々の迷宮の中では、いつも開けつ放しの家々の奥の、先祖の祭壇や佛像の前で神聖な燈明の輝き初める時である。——その時、戸外では何もかも暗くなつて行き、そして古屋根の幾千の瓦は明るい金色の空に黒い波紋狀となつて浮き出す。その時この笑ひ興じてゐる日本の上に、薄暗い、不思議な、古めかしい、野蠻じみた、何んと云つていゝか私には分らないやうな沛悲しい或る印象が過ぎて行く。そしてその時、殘つてゐる陽氣と云つたら、たつだ一つの陽氣と云つたら、それは眞暗くなつた町町に、工場や學校から出て來て潮のやうに擴がつて行く子供たちの群れである。即ち小さいムスコたちや小さいムスメたちの群れである。すべてこれ等の木造の建物の深い陰影の中に、おどけた縞目の、おどけてたくし上げられた、青や

赤の派手な小さい着物が現はれて來る。それから帶のきれいな結び目が現はれて來る。それから子供の髪に挿した花かんざし、銀や金の髪飾が現はれて來る。

小さなムスメたちは、皆んな彼等の大きな袖を風にそよがせながら鬼ごつこをしたり遊んだりしてゐる。十から五つ、或はもつと小さいのも交つて、もう一ぱし大きな髪に結ひ立てたり、大人のやうな尊大ぶつた髷に揚げたりして。

おう！　此の黄昏時を、非常に長い着物を着て、玻璃製の喇叭（びんぼん？）を吹いたり、奇妙な紙鳶を飛ばせるために一生懸命に駈けたりして、跳ねまはつてゐる、たとへやうのない人形たちの愛らしさ。……生れながらにして奇怪で、また年をとるに從つて益々奇怪になるべき運命を有つた此等すべてのニッポンの子供の世界は、特殊な遊戯と奇體な叫び聲でその生活が始まるのである。彼等のおもちやは少し鬼臭を帶びたところがあつて、他の國の子供等をば怖がらせそうである。彼等の紙鳶は大きな藪睨みの目をしてゐたり、吸血鬼のやうな

形をしたりしてゐる。……

そして毎日夕方になると、薄暗い小さい往來では、清新な無邪氣な併し極端に風變りな此の陽氣さが一ぱいに溢れる。……風に吹かれて折々空中に舞ひ上つてゐる思も及ばないものをば誰れだつて想像して見ることは出來ない。……

三十九

この小さいクリザンテエムはいつも黒つぽいものばかし着て居る。此國ではそれがほんとうの高貴のしるしなのである。彼女のお友だちのオユキ・サン、マダアム・トゥキ（時さん）、及びその他の娘たちが樣々の變つた色をした柄を好んで着たり、髮には派手な簪を挿して居るに係らず、彼女は藍か鼠がゝつたものを着て、愼ましやかな色合の刺繍をした黒の幅廣の帶を腰に締め、そして髮に

はブロンド色の鼈甲のかんざしの外は決して何も挿してゐない。若し彼女が貴族であつたなら、着物の脊中の眞ん中の處に、その中に何か意匠のしてある、商標のやうに附けられた刺繍の小さい白い輪をつけるであらう。――一般に大抵木の葉の形をつける。そしてそれが紋章になるのである。高貴な婦人の體面を保たせる爲めには、實にこの小さい脊中の紋章丈けがクリザンテエムに缺げて居る。

（日本では、あの雲のやうな色合をした、金や銀の火龍を刺繍した、花やかな美しい着物は、貴婦人たちが常に室内に藏ひ込んであつて、何か特別の場合に着るのである。――でなければ芝居のためか、踊り子のためか、娘等のためである。）

クリザンテエムは、日本のすべての女と同じやうに、いろんな澤山なものを彼女の長い袂の内側にしまつて置く。その中は、かくしのやうになつて居るので

ある。

彼女は其處へ手紙や、綺麗な紙に書かれた色々な書附や、坊主のこさへた護符や、又殊には最も思ひがけない用事に使用する絹のやうな紙の折り疊みの澤山を入れて置く。それは急須を拭ひたり、草花の濡れた莖を持つたり、或は必要の生じた場合に彼女の可笑しな小さい鼻をかむ爲めに使ふのである。（手當が濟むと、彼女はその使ひ濟みの紙片を手早く皺くちやにして丸めて、そして厭さうに窓の外へ投げ出す。……）

最も上流の婦人達も日本では斯うして鼻をかむのである。

四十

九月二日。

偶然が私たちに不思議な珍しい近づきを得させた。それは先月あのやうに驚ろく可き參詣が行はれた Tortue Sauteuse（八坂さま？）の寺の重立つた坊主達との近づきである。

此邊近くへ來ると、あの祭の晩に人だかりのして居た場所が今は同じ程度で寂びしい。そして、夜はあのやうに生き〳〵して居たのが、眞晝間、宗教的のすべての物が皆死んだやうに朽廢して居るのに驚かされる。時代のために磨り減らされた花崗石の階段には人の影一つも見えない。彩色も金光も塵埃に汚されてゐる。莊麗な大きな樓門の下に誰も居ない。行き着くまでには、山の中腹にある段々の附いた淋しい中庭を幾つも越え、嚴めしい門を幾つもくゞり、そして市街と人間の騷音の上の方へと高く高く、無數の墓石の一ぱいに並んだ神聖な區域を、一歩々々登つて行かなければならない。すべての敷石の上、すべての塀の上には、靑苔や日蔭かづらが生えてゐる。時代のついた物の灰色は、

灰の降つたやうに到る處に擴がつて居る。

道傍にある最初の寺には、巨人のやうな一つの佛陀が蓮の臺の中に坐つて居る。——青銅の大きな臺に乘つた高さ十五メエトル乃至二十メエトル位の鍍金の偶像である。

遂に最後の樓門の聳えてゐる所に達する。其處には正門の守護神ともいふべき傳說めいた二つの巨像がある。その一つは右に、一つは左に、鐵の燻ぶつた檻の中にいづれも野獸のやうに幽閉されて居る。彼等は擊たうとして拳を上げ、氣味の惡い微笑を湛へた獰惡な顏附で、恐ろしい身構へをして居る。彼等の身體は人々が格子の間から投げた、嚙みつぶした紙の礫で一杯になつてる。そしてそれが白い癩病病かなんぞのやうに、恐ろしい手足の上に糊着して居る。信者達が彼等を和める爲めに信仰篤い坊さん達に柔かい紙の上に書いて貰つた祈禱を投げ附けるのである。この案山子の間を通りぬけて最後の中庭へはびつて

行く。私たちの友達の住居が右手にあつて、寺の大きな本堂が正面にある。

敷石の列んでゐるこの中庭の中には物見櫓のやうに高い青銅の燈籠がある。青い羽根のやうな新綠の叢葉をした幾百年の蘇鐵の澤山の幹は、大きな candelabres（一つのランプ臺の柱から澤山な枝が出て、その上にランプがついたもの）の枝のやうに重々しい對稱の形に植わつてゐる。正面全部がすつかり開けつ放しになつてゐる殿堂は、暗がりの中へ消えてゐる覺束ない金光の遠景を以て、奥深く薄暗くなつて居る。その一番奥まつた所には偶像が坐つてゐる。外からは、その冥想してゐる姿勢と合掌してゐる手がぼんやり覗はれるやうになつて、その前方が金屬の不思議な瓶の載せられた祭壇である。その瓶の中には銀や金の蓮の細つそりした束が投げ入れられてある。僧侶たちがいつも祭壇で焚く線香の快い薰が入口からもう匂つて來る。

私たちの友達の坊主たちの家。——這入つて右手の。——此處まで來るのは

何時も生やさしい事ぢやない。

魚類の或る怪物が、尤も釣爪や角を持つては居るけれど、鐵の鎖で入口の上の方に吊されて居る。ほんの僅かの微風にもそれが軌みながら搖れて居る。その下を通つて、高い大きな僅かに燭光で照されてゐる最初の廣間へ這入つて行く。其處には隅の方に金色の偶像、鉦、譯の分らぬ宗教的の道具などが輝いて居る。

唱歌隊の子供のやうな、小さい侍僧のやうなものが出て來て、少しももてなし顏はせずに進み出て用向きを尋ねる。

——マツ・サン!! ドナタ・サン!! 彼等は頗る驚いて繰返へして云ふ、誰々の處へ案内して貰ひ度ひのだと云ふ事を彼等に說明した時に。——おゝ! いけません、とてもお逢ひにはなれません。と彼等が答へる。——はい、お勤行中で御座いますから。オリマス! オリマス! 彼等はもつとよく分らせる爲め

に合掌して見せて、跪づきながら然う云ふ。(彼等は祈禱して居るのである! 深遠な祈禱の最中なのである!)

私たちは云ひ張つたり、更に强い語氣で話したりする。委細構はず上つて行かう。決心した人々のやうに私たちは靴を脫ぐ。

とう〳〵マツ・サンとドナタ・サンが僧院の物靜かな、奥深い、低い方から出て來る。彼等は黑い紗の衣を着て居る。そして頭を剃つて居る。愛惜よく笑つたり云譯したりしながら彼等は手をさし延べて案内する。私たちは彼等と同じ樣に跣足で、類なく白い疊の敷かれた、がらんとした部屋を幾つも通つて、彼等の神祕な住居の奥まで蹤いて行く。續いてゐる部屋々々は、赤い絹糸の結び紐や房で捲き上げられた見ごとな美しい竹の簾垂だけで互に仕切られてある。

すべて室内の構造は非常に精密に細工され、少しも裝飾のない、少しも彫刻のない、新しい牛酪の色をした同じ材木から出來て居る。皆べてが新しく汚れ

目なく、決して人間の手を一寸も觸れないやうである。この氣持のよいがらんどうの中に、間を置いて飛び〳〵に、巧みに象眼された小さい高價な床几みたいなものが置かれて、その上に青銅の古い猿や花瓶なぞが載せられてある。壁には非常に几帳面に截たれた額緣のない細長い灰色の紙の上に薄く描いた大家の素畫なんぞが懸けられてある。その外には何もない。椅子もなければ、座布團もなければ、家具もない。これが他に類のない汚れ目のない清潔と無一物で以つて出來上つた高雅、求められたる簡素の極致である。

そして此の坊主達の跡について人氣のない廣間を次ぎ〳〵に歩いて居ると、佛蘭西に於ける吾々の家では、餘りに多くがらくた物が列んでるやうに思はれる。餘計なものや邪魔なものが急に厭でたまらなくなる。

跣足の人たちの此の沈默の歩行の行き止まつた所は、畫でもなほ暗い中の凉しさに坐られるやうな所で、其處は室内の或る一つの緣側であつて人工的な景

色の上に打ち開けて居る。井戸の底とでも云はうか、それは oubliette〔地牢、四方の壁が塞がれて上部からの〕の穴のやうな一つの大きな箱庭であつて、押し潰されたやうな山で周りを圍まれて、僅かに夢の中のやうな薄明りを高い所から受けて居るのみである。そしてそれが天然の大きな谷あひのやうな趣を呈して居る。其處には洞穴も、嶮しい岩も、谷川も、瀧も、島も見る事が出來る。吾々の知らない日本人の方法で短矮にした樹木は、その節くれ立つた古い枝にすつかり小さい葉を附けて居る。一體の青い物寂びた色彩が、確かに百年を閲してゐるこの全體によく調和して居る。

きれいな水の中には、金魚が游ぎまはつて居る。そして小さな龜たち（多分 sauteuse〔踊る〕龜であらう）が彼等の灰色の甲と同じ色の花崗石の小島の上に眠つて居る。

何處からとも知らず危險を侵して下りて來た青蜻蛉も居る。そして小さい睡

蓮の上に輕く翅を振つて止まつて居る。

私たちの友達の坊主たちは何處となく宗門臭い所はあるけれども、無邪氣な子供の笑ふやうに大そうな笑ひ方をする。肥つた、頰のふくらんだ、くり〳〵した頭で、少しも狐疑せずに彼等は私たちの佛蘭西の酒をよく嗜なむ。

私たちはそれからそれへと話を進める。私は小さい瀧の靜かな音を聞きながら、よく物を知つてる日本人の使ひさうな言葉を話して見たり、また動詞の時を試みて見たりする。卽ち希望、許容、「ば」で終る假定を試みて見たりする。

彼等は皆んな話しながら、寺の用事をしたり、界隈に群がつてゐる末寺の爲めに複雜な判行で封印をした通達書をこさへたりする。或は遠方の病人に丸めて嚥ませるために筆で書いた小さい加持祈禱の護符をこさへたりする。彼等はその肥つた白い手で婦人のするやうに扇子を弄んでゐる。そして私たちが花の

香のはいつた國産の樣々な飲料を味つてゐる間に、彼等は Bénédictine の罎や Chartreuse の罎を持つて來させて明けたりする。彼等は西洋の同業者によつて調合されたこれ等の飲料をも賞美するのである。

彼等が船へ私たちの訪問を返しに來ると、彼等は例へば La Vie Parisienne みたいな吾々の繪入雜誌の俗な繪に見入る爲めに臆面もなくその小さい平たい鼻の上に彼等の大きな圓い眼鏡をかける。若し婦人を描いた繪でもあると彼等は一樣に鄭重にその肖像畫の上に指をまご〳〵させてゐる。

彼等の大きな殿堂の中で彼等は非常に美しい宗教上の儀式を行ふ。そして私たちは今それに招待されたのである。鐘の音がすると、二三十人の盛裝した役僧たちが入場の儀式で偶像の前へはいつて行つて、跪拜をして、手を打ち合せながら、巧妙な往き戻りをする。その樣が或る神秘的な quadrille「四組の舞踏」に似

てゐる。

實に！　本堂は徒らに暗く宏大で、偶像も立派なものである。……此の日本に於ては、外觀の立派でないものは一つもない。度し難い野鄙と笑ひの癖が、有らゆるものゝ底に潜んでゐる。

それから瞑想の邪魔になる會衆も來て居る。そしてその中には知つた顏の見えることもある。私の義母の居ることがあつたり、從妹の居ることがあつたり、——また前の日に私たちが花瓶を買つた陶器商の居ることがあつたりする。非常に愛らしい小さなムスメたちや、猿のやうな顏をした老婆たちが、煙草入れを下げたり、繪の描いた日傘を持つたり、小さい聲を立てたり、お辭儀をしたりしながら這入つて來る。おしやべりするやら、挨拶するやら、身動きするやら、彼等を眞面目にさせるには有りと有ゆる苦痛を忍ばねばならない。

四十一

九月三日。

クリザンチエムは今日お梅さんに附添はれて、私の一番年下の義妹の雪さんを連れて、私に逢ひに初めて船へ來た。この婦人たちは非常に氣取り込んで、非常にひとがらな風をして居た。

私の船室の中には一つの大きな佛陀が玉座の上に坐つてゐる。そしてその前に一つの漆の盆がある。その中へ、私の忠實な水夫が私の服の中に迷ひ込んでゐた細かい銀貨を見附けては入れて置く。神秘主義に心を傾けてゐたお梅さんは本統の祭壇の前にでも居るやうな氣になつた。彼女は此の上もなく眞面目になつて短い祈りを佛に捧げた。それから彼女の紙入を引き出して、(それは習慣

に從つて、彼女の背中の後に、煙草入や小さい煙管と一緒に、膨らんだ帶に挾まれてあつた。）彼女は禮拜しながら信仰篤い賽錢を盆の中へ入れた。

訪問の時間中、彼女たちは頻る體面を維持して居た。併し歸る時になつて、イイヴに逢はないで去る事を欲してゐないクリザンテエムは、隱さうとして隱し切れない依固持を以て彼の事を訊いた。そして私はイイヴを呼んでやつたが、イイヴは彼女にとつて大層なつかしいものらしく見えた。――今度こそは私がそれに就いて少し眞劍な倦悲を感ずる位に。今まではたゞ漠然と怖れて居た此悲む可き結果が、近く現はれやうとしてゐるのではあるまいかと、私は自分に問うて見た。……

四十二

九月四日。

私は今日古い荒れ果てた或る町中で、きれいに着飾つた一人のやさしいムスメに行き逢つた。そのムスメの着物は朽廢の薄黑い背景の上に鮮やかに浮き出して見えた。

それは長崎の全くの町端れ、此の町の非常に古い區域に於てゞあつた。この邊には數百年を經た老木があつたり、佛陀、阿彌陀、辨天、觀音なぞを祀つた、莊麗な高い屋根をした古い寺々があつたりする。沈默に充ちた寺の中庭には花崗石の怪像が坐つてゐて、敷石の間からは雜草が伸びてゐる。この淋しい町中を横切つて幅の狹い急流が、深い川床の上を

流れて居る。その小川には弓なりの小さい橋が幾つもかけられて、苔に蝕まれた花崗石の欄干が附いてゐる。此邊に在るものは皆んな日本の最も古い繪にあるやうにすべて奇態に整頓して、いやに顔を顰めたやうな所がある。

私は眞晝の燒くやうな暑い時刻に歩いてゐた。そして誰れにも出逢はなかつた。――たゞ二三人の餘り見慣れない堂守か墓守らしい僧侶が、尤もそれは寺院の中ではなかつたけれども、暗青色の蚊帳の下で晝寢をしてゐるのが、開け放された窓から見えた。

突然、その小さいムスメが私の目にはひつたのであつた。私より少し高い處に、灰色の苔に蔽はれたこれ等の橋の一つの弓なりの頂の處に、光線を一ぱいに浴びて、太陽を眞正面に受けて、黒い古い寺と木蔭を背景にして、眩しい妖精のやうな姿で現はれて來たのである。彼女は着物の褄を片手に取つて、實際よりもすらりとした風を見せるやうに、裾の方を足首に捲きつけてゐた。彼女

の小さい奇妙な頭の周りには、骨の澤山ある、透き通るやうに輝いてゐる、彼女の丸い日傘が、黒く縁取られた赤と青の大きな後光を作つて居た。そしてその橋の石の間から生えた、淡紅色の花をつけた夾竹桃は、彼女と同じやうに日光を浴びて、彼女の傍に咲き亂れて居た。この若い娘とこの花の咲いた夾竹桃の後には、すべてのものが薄暗い對照をなしてゐた。

赤と青の美しい日傘の上には、白い文字で斯う云ふ文句が書いてあつた。それはムスメたちがよく使ふ句で、また彼も習つて見覺えてゐた。それは『雲よ、止まれ、彼女の通るのを見る爲めに。』といふ文句である。そして實に理想的な日本品といふべき此の貴重な小さい人間の爲めに、わざ〳〵止まるだけの價値は十分にあつたのである。

けれども餘り長く立ち止まつて見とれてゐる譯には行かなかつた。それでもなほ一箇の誘惑物たる事は失はなかつた。他のものと同樣明かに一個の人形で

ある。陳列棚の人形である。そしてそれ以上何んでもない。彼女を眺めながら、私は、クリザンテエムが此の同じ場所に現ばれて、この着物を着て、この光りと太陽のこの圓光を浴びて居たなら、矢つ張し同じ魅力の効果を生じたであらうと思つた。

なぜといふに、彼女はしとやかである、クリザンテエムは。これはもう爭ふ可からざる事である。……昨夜、私は彼女を褒めた事を思ひ出す。もう夜が更けてゐた。私たちみたいな小さい夫婦づれの同行者と一緒に、私たちはいつものお茶屋と勸工場めぐりからの歸りであつた。他のムスメ達はねだつて買つて貰つた新しい銀の髪飾で飾り立てゝ、おもちやをいぢりながら、手をつなぎ合はして歩いてゐたのに、彼女は疲れたと云つて車の中に半ば身體をこゞめていて來るのであつた。私たちは今日私たちの花瓶に挿す可き大きな花束を彼女の脇へ置いて置いた。——季節の最後の、もう秋の匂ひのしてゐる莖の長い蓮

や、遲咲きの菖蒲を。——そして小さい車の中の此の小さい日本の女が、此等の水花の聞にぐつたりと身體を崩してゐると、行き交ひの提灯の變る〳〵の色に様々に照されて行く。その有様を見るのは愛らしいものであつた。若し私が日本に着いたあの晩に誰れか〻私に彼女を指し示して、『其處を行くのがあなたのムスメになるんでせう。』と云つたら、私は少しの疑ひもなく彼女に魅せられてしまつたに相違ない。——ところが、實際は、いや、私は今決して魅せられてはゐない。それはクリザンテエムに過ぎないのである。どうしたつて彼女なのである。彼女でなくて何者でもないのである。周旋人の勘五郎が私に供給してくれた、姿も思想も小まちやくれた、あの喘ふべき小さな女に過ぎないのである。……

四十三

私たちの家では、飲む水も、茶を沸す水も、それから一寸した洗ひ物をする水も、白い陶器の甕にはひつてゐる。——此等の甕には急流に飜弄されてゐる藻草の中を游いでゐる魚の繪が描いてある。そしてこれ等の甕はなる可く冷たくして置く爲めにお梅さんの屋根の上の、私たちの突き出した緣側から腕を伸ばせばやすくととゞく位な處に据ゑてある。界隈の喉の渴いた猫たちのためにはほんとに aubaine〔所有主がなくなつた時之を政府に沒收する物〕とでもいふべきものである。夏の美しい夜の續く頃になると、不調和な色彩でぬたくつた私たちの甕のある此の屋根の隅つこは、猫たちに取つては、彼等が塀の上でいがみ合つたり長い間獨りぼつちで夢想してゐた後で、月の光を浴びた樂しい媾曳の場所となるのである。

私はイイヴが初めて此の水を飲まうとした時に、その事を彼に告げてやるのが義務だと考へた。

——おゝ！　彼は驚ろいて答へた。　猫ですつて！　それが汚ないと云ふのですか？

この點に關しては、クリザンテエムも私も彼と同意見である。私たちは猫が汚ない唇をした動物でない事を知つて居る。それで私たちは猫の後で飲む事は平氣である。

イイヴにとつては、クリザンテエムだつて同樣である。『あの女は汚なかない。』斯う云つて彼は彼女の後から彼女の小さい茶碗で喜んで飲む。彼女の唇にふれたのも猫の飲んだのと同じことにして。

それから！　これ等の陶器の水甕は私たちの家庭の毎日の大變な心遣ひの一

つである。夜、私たちがあの坂道を上るのに喉を渇かして了ひ、それからまた道々氣晴らしに時さんの菓子を食べながら、散歩から歸つて來ると、その襄の中に何時だつて水のはいつてゐたことがありはしない。お梅さんだつてお雪さんだつて、また彼等の若い女中のデデさん〔原文の註。デデ・サンは佛蘭西語で云ふと mademoiselle Jeune fille（若い娘さん）の意味で、これは非常に廣く用ひられる言葉である。〕だつて、晝間にそれを一ぱいにして置くやうに見通しをつけさせることが不可能なのである。――そして私たちが遲く歸つて來ると此の三人の婦人は眠つてゐる。私たちは自分で此の面倒を見なければならなくなる。

それで、私たちは締め切つた戸をすつかりまた開けて、また靴を穿いて、庭へ水汲みに下りて行かなければならない。

そして、クリザンテエムは暗がりの、蟲の啼いてゐる、植ゑ込みの中へ獨りで行く事を死ぬ程怖がつてゐるから、私が井戸まで彼女と一緒に行つてやらな

ければならない事になる。

それをするには私たちは明りが必要になる。ぢやお晴さんの處で買つた澤山な提灯の中から搜さう。それは毎晩私たちの紙の小さい戸棚の一つの奥に積み重ねて置いてある。だが一つだつて蠟燭の燃え盡してゐないのはありはしない。――私は然うだらうと思つてゐた！　さあ、今度は思ひ切つてどれでも手あたり次第の提灯を取つて、その底の鐵の棒に新しい蠟燭を立てるのだ。――クリザンテエムが一生懸命でそれをする。――蠟燭が割れて、折れる。ムスメは指を突いて、澁面をつくつて、しく〳〵泣き出す。……これが毎晩の避く可からざる光景である。そしてこれがために私たちが暗青色の蚊帳の下にやすむ時間を十五分間はたつぷり遲らされる。その間に屋根の蟬は高い處から私たちに彼等の最も人を馬鹿にするやうな音樂を聞かせて居る。……

そして、これが若し他の女となら慰めにもならう。――私の愛してゐる他の

女と一緒なら。――だがクリザンテエムと一緒なのだから、私には實に堪へられない。……

四十四

九月十一日。

八日間は可成り平和に過した。その間私は何も書かなかつた。私は段々私の日本の部屋に慣れて來たやうに思ふ。國語や衣服や顏面の異つて居るのにも。三週間來歐羅巴からの手紙は何處でだか知らないが、まごついてゐて、一つも着かない。そしてそれは、斯うした場合常にさうである如く、過去の事物に忘却の輕い被衣を投げかける事になる。

それで私は毎晩忠實に宿まで上つて行く。時としては星明りに充ちた美しい

夜を。時としては暴雨の降りしきる中を。そして毎朝、よく響く空氣の中に梅さんの祈禱の聲が傳はつて來ると、私は目を醒して海の方へ再び下りて行く。新鮮な朝露で草が一ぱいに濡れてゐる小徑を通つて。

骨董品をあさる事がこの日本の國での一番の鬱晴しだと私は思ふ。古物を並べた小さい店で、疊の上へ坐り込んで店の者と一緒に茶を飲む。それから自分で立つて行つて、非常に奇態な古めかしいものゝ重り合つてゐる戸棚の中や箱の中を搔き廻はす。取引は非常に云ひ爭つて、たまに數日に渡つて笑ひながら取り極められる。おとなしい小さな狂言をお互に打つてるやうな有樣で。……

私はほんとに小さい［petit］といふ形容詞を使ひ過ぎる。私はその事を隨分氣にしてゐる。併し他にどうする事が出來やう？――この國の事を書いてゐるといふと、一行に十度もこの字を使ひ度くなる。小さい［petit］、ひねくれた［mièvre］、可愛らしい［mignard］。――日本は精神的にも物質的にもこの三

つの言葉の中に盡きてゐる。

そして私の買つた品物はあの高臺の上の、木と紙で出來た私の小家の中に積み立てられてある。――けれどもあの小家は、佐藤さんとお梅さんが然う思つてゐたやうに、初め部屋の中に何んにも無かつた時の方が、幾ら日本的だつたか知れない。今では數箇の宗教的の形をした燈籠が天井から下つてゐる。それから澤山な臺の上に澤山な花瓶。寺の塔の中にある程澤山な男神女神の偶像。又神道の小さい祭壇もある。その前でお梅さんは殆んど這ひつくばるやうにして祈つたり歌つたりする。年とつた牝山羊のやうな震へ聲で。

『諸々の罪をばいとも清く洗ひ流して下さい。おゝ、アマ・テラアス・オオミ・カミ。加茂の川水で穢れを洗ひ落すやうに……』

可哀さうなアマ・テラアス・オオミ・カミ。お梅さんの穢れを洗ひ流して下さいー　まあ何んと云ふ長たらしい冒瀆の業であらう！

クリザンテエムは、佛教徒であるから、時たま寢る前に祈ることがある。睡氣に打ち克たれながらも、彼女は私たちの一番大きい金色の偶像の前で兩手を打ち合せて祈るのである。けれども祈りがすむと直ぐその下から子供らしい嘲弄の微笑を洩らす。彼女の母のマダアム・ルノンキュウル〔おきんさん〕の家に行くと薄暗い佛壇のこさへられてある彼女の Ottokes（彼女の先祖の靈）に對しても彼女が拜むことを私はよく知つてゐる。彼女は祝福と幸運と智慧を佛に祈るのである。……

彼女の神々と死者に對する觀念のどんなものであるかを、誰れがわかるだらう？　彼女には魂があるか？　彼女には魂があると自分でも思つてゐるだらうか？……彼女の宗教は此の世界の如く古い神の系圖の或る一つの曖昧な混溷であつて、それは非常に古い事物に對する尊敬心に依つて保存され、また我々の中世期の時代に支那の傳道者に依つて印度から齎らされた最後の幸福な虚無に

關する更に近代的な思想に依つて保存された宗教である。坊主たち自身でさへ迷つてゐる。――まして況んや、寢ぼけてゐるムスメの頭の中で、幼稚と輕浮の接ぎ合せで、何物になり得やうか？……

二つのつまらない事件が幾らか私を彼女の方へ牽きつけた。（斯うした關係でいつまでも離れ〴〵になつてゐるといふことは有り得ない。）――その第一の事件は斯うである。

お梅さんが或る日私たちの所へ、彼女の華やかな娘盛りの頃の形見の、稀に見る透明なブロンド色の鼈甲の櫛を持つて來た。それは髪の眞ん中に輕く挿して、その齒が透いて見えるやうに浮かして置くと恰好のいゝ櫛であつた。彼女はそれを可愛らしい漆の箱から取り出して、指先で目の高さほどにかざして、瞬たきしながら空を透して見た。――美しい夏の空を。――人が寶石の透明を

確かめる時のやうに。

――ねえ。　彼女が云つた。　あなたの奥さんに上げるのに丁度ようございますわね。

すると私のムスメは、ひどく夢中になつて、此の櫛の質がどんなに透明だとか、どんなにいゝ恰好をしてるなぞと云つて感心してゐた。

私に取つては、一番氣に入つたのはその漆の箱であつた。蓋には金の上から金を塗つた見ごとな繪があつて、或る風の日の稻の田を極く近間で見た景色が描いてあつた。恐ろしい風に吹き倒された穗や葉の亂れた繪であつた。其處にも此處にも、縺れ合つた稻の莖の間から、泥深い地びたが見えてゐた。それから小さい水溜まりが幾つもあつた。――それは透明な漆の片を置いたもので、その上に金の小さい屑が濃い液體の中の澱のやうに浮いてゐた。よく見るには顯微鏡の入りさうな二三匹の昆蟲が恐れをのゝいてゐるやうな風で、稻の葉に

すがりついてゐた。——そして畫面全體が女の手の大きさほどしかなかつた。

お梅さんの櫛については、白狀すると、私は何んにも云ふ事はなかつた。そして隨分くだらないものでもあれば高價なものでもあると思ひながら、私は耳を貸さずにゐた。その時、クリザンテエムが悲しさうに答へた。

——いえ。たくさんよ。わたし欲しかありませんわ。しまつてゝ頂戴な、おかみさん。……

然う云ふと同時に彼女は意味の深い太息を漏した。それは斯う云ふ事を意味して居た。

——あの人はもう然うまでわたしを愛しちやゐないんだもの。……駄々をこねたつて無駄な事だ。

直きに私は望み通りの賣買を濟ませた。

やがて、今にクリザンテエムが、齒を黑く染めた神信心なお梅さんのやうに、

年とつた一匹の牝猿になる時が來ると、今度は彼女がその品物を賣りつける番が來るであらう。——次ぎの時代の誰か美しい娘に。……

……今一つの事件は、暑氣あたりで私が頭痛のしてゐる時であつた。私は蛇の皮の枕に頭を休ませながら疊の上に横はつてゐた。目がかすんでゐたから、何もかも廻轉してゐるやうに私には見えた。見晴らしのいゝ縁側も、夕方の輝いてゐる大きな空も。空には奇妙な紙鳶が幾つも揚がつてゐた。そして私の身體は空氣を充たして啼いてゐる蟬の聲につれて苦しく震動してるやうな氣持であつた。

彼女は私の側に蹲踞つて、彼女の小さい拇指で力あり丈けに私の顳顬を押へながら又錐で其處を揉み込むやうに、その拇指をまはしながら、日本人の方法で私を治さうとするのであつた。彼女はこの力仕事で眞赤になつてゐた。その

おかげで私は、阿片の微醉に似たやうな感じで、實際に安らかになる事が出來た。

それからもしや私が發熱せねばよいがと心配して、彼女は紙の上に書かれた利き目のある護符を、彼女の指の間で丸藥のやうに丸めて、それを私に食べさせようとした。それは彼女が大事に片一方の袂の裏に藏つて置いたものであつた。……

さて、私は笑ひもせずにその護符を呑み下した。彼女の心を傷けないやうに。彼女の小さな滑稽な信仰を動搖させないやうに。……

四十五

私たちは今日、イイヴと私のムスメと私で、三人一緒にうつるために評判の

寫眞屋の家へ行つた。

私たちはそれを佛蘭西へ送つてやらう。——イイヴは、私たち二人の間に挾つてゐるクリザンチエムのこの顏を見た時の彼の細君の驚きを想像しながら、もう微笑してゐる。そしてどんな風に說明したら旨く細君にわからせる事が出來やうかと考へてゐる。

——あゝ、さうだ。あなたの知つてる女だと云つてやりませう。それで澤山！日本には吾々の國と同じやうな體裁の寫眞屋が澤山ある。たゞ彼等が日本人であつて、日本の家に住んでるだけが違ふのである。今日私たちのやつて行く寫眞屋は、此間私が美しい一人のムスメに出逢つたことのある大きな木と薄暗い寺の列んでゐる此の古びた町はづれの奧で營業してゐる。その看板は數個國語で書かれて、小さい流れの川岸に臨んだ塀から突き出てゐる。その流れは上の方の靑い山から落ちて來て、その上には花崗石の太皷橋が幾つも架かつてゐ

て、兩岸は輕い竹や滿開の夾竹桃で緣どられてゐる。

昔ながらの日本の斯んな眞ん中に寫眞屋が巢をくつてゐるのを見ては驚き且つあきれて了ふ。

丁度今日は彼の門の前には人がたかつてゐる。私たちは惡い時に來合せたものだ。車屋の車は彼等の乘せて來たお客を待ちながら一列に列んで供待ちをしてゐる。そしてそのお客たちは皆んな私たちより先に順番が來ることになるだらう。裸で黥をして、鉢卷をして髷に結つた車屋たちは、お互に喋べり合つたり、小さい煙管で煙草をふかしたり、川の水の中で彼等の筋肉の逞ましい足を冷やしたりしてゐる。

入口の前庭は提灯が下がつてゐたり小さな木が植わつてゐたりして、申し分のない日本式になつてゐる。併し撮影室に這入ると、巴里かポントアアズ〔巴里の北西の小都會〕にでも來たやうである。同じやうな『古樫』の椅子に、同じやうな色の褪

せた大形の圓椅子に、石膏の圓柱と板紙の岩。

丁度その時撮してゐたのは身分ある二人の婦人(母と娘)で、二人一緒に坐つて、ルイ十五世時代の附屬物と共にかびね形に取らせてゐる。私が斯んなに近間で見た中では、この國で一等立派な婦人達である。可成り珍しい一群で、上流社會の長い顏の、米のせいで、青白い、貧血症の、無氣力な色をした上に、純粹の紅で心臟形に塗られた唇をしてゐる。さすがに併し爭ふ可からざる育ちといふものが、人種と既得想念の深い溝渠があるにも拘らず、私たちを壓迫してゐる。

彼女等は明らさまな侮蔑の目でクリザンテエムをぢろ〳〵眺める。クリザンテエムの服裝だつて着附だつて彼女等と同樣上品であるにも拘らず。そして私はどうかと云ふに、私はその二人を眺め飽きることが出來ないでゐる。彼女等はこれまで見たことのない不可解なものか何ぞのやうに私の心を奪つてゐる。

彼女等のなよ〳〵した身體と異境的な美しさをした姿が、强ばつた着物と脹らんだ帶の中に埋まつてゐる。そしてその帶の兩端は、疲れた翼のやうにだらりと下つてゐる。私には何故だかわからないが、彼女等を見てゐると、大きな珍しい昆蟲を思ひ出す。彼女等の着物の風變りな模樣には、夜の蝶々見たいな暗い雜色の何物かゞある。とり分け、彼女等の小さな、疲れたやうな、細い、切れ上つた、やつと開いてるやうな目の神祕がある。我々に取つては絕對に閉された思想の世界とも云ふべき、或る一つの空漠枯淡な不合理の內的思想を示して居るが如き彼女等の表情の神祕がある。——そして私は彼女等を見つめながら考へる。我々はこの日本の國民とどんなに遠ざかつてゐるか、我々はどんなに懸け離れた人種であるかを！……

それから、私たちより先に來てゐる數名の英國水兵を先にうつさせねばならぬ。彼等は白い麻の服を着飾つて、砂糖で出來た人間のやうに赤くつて、丸々

して、活き〳〵してゐる。彼等は圓柱の周りに間の抜けた樣子をして姿勢を作る。

私たちの順番がとう〳〵廻つて來る。クリザンテエムは意氣な流行に從つて、彼女の足の爪先を出來る丈け內側に曲げて、非常にしなをつくつた樣子で、靜かに姿勢を整へる。

そして、私たちは、へぼな寫眞屋の前に一列に列んで、私たちを映す種板の上で、可なり滑稽な小さい家族の風をしてゐるのである。

四十六

九月十三日。

イイヴは今夜私より三時間早く非番になつた。——私たちの quarts（當直

割」の勤務の極められてゐる方法に依つて、絶えず順々に斯ういふ風になつて行くのである。此の節は、イイヴが先に上陸して、十善寺へ上つて行つて私を待つてゐる。

望遠鏡で、私は、山の青々した小徑を登つて行く彼を甲板から見てゐる。彼は非常に輕さうな歩調で歩いて行く。殆んど駈け出しさうなばかりにして。彼はあの小さいクリザンテエムに逢ひに行く爲めに、どんなにか氣が忙いてゐるかと思はれる！

九時頃になつて私が行つて見ると、イイヴは私の部屋の眞中に大肌抜ぎになつて坐り込んでゐる。（肌を抜ぐのはこの國では室内に於ける當然の一つの有り觸れた狀態である。それは私も認めてゐる。）そして彼の周りには、クリザンテエムとオユキと女中のデデさんが、彼の背中を一生懸命に拭いてゐる。――鶴

やその他の滑稽なものを染め出した淺葱の小さい手拭で。……

――あゝ！　そんな暑い目を見たり、そんなざまをしてるといふのは一體何をしてつたと云ふんだらう？

彼が私に話す所に依ると、私の家の近くの、――山の少し上の方で、――彼は撃劍の道場を見つけ出した。そして其處で彼は日の暮れるまで仕合をしてゐた――日本人を向に廻はして。日本人は彼等の國の流儀に從つて、猫のやうに飛び上りながら、兩手で劍を使つた。彼は、佛蘭西流の彼れの劍法に依つて彼等を

打ち据ゑた。それで皆んなが彼に大層禮を云つたり、敬意を表したりして、——そして非常に冷たい小さい旨しいものを持つて來てくれたりした。そんなことで彼は汗みづくになつたといふのであつた。……

——あゝ！　なるほど。でも私にとつてそれは何んにも辯解になつてゐはしない。……

彼は彼の夕方を樂んでゐる。彼は毎日行つて彼等を負かしてやるのを樂んでゐる。彼は弟子取りをすることさへ考へてゐる。

一度彼の脊中を乾かすことがすむと、今度は皆んな一緒になつて、即ち三人の此のムスメたちと彼と一緒になつて、ニッポンの pigeon vole をはじめる。

——實際、どの點から云つても、私はこれ以上無邪氣で、これ以上正しいことを望むことは出來なかつたのである。

シャルル・Nと彼の細君のマダアム・ヂョンキイユ〔お鈔さん〕が意外にも十時頃私たちの所へやつて來た。（彼等は私たちの近所の薄暗い繁みの中を散歩してゐたのであつた。そして私たちの家の明りを見て上つて來たのである。）

彼等の計畫はこれから蟇蛙のお茶屋〔どんこう茶屋〕へ行つて夜を更かさうといふのである。それで彼等は其處まで氷菓子を食べに行くため私たちを誘ひ出さうといふのである。——それには少くとも此處から歩いて一時間はかゝる。町の向側の、山の中腹の、Osueva〔お諏訪さま〕の大きな塔の境内にあるそのお茶屋まで行くには。併し彼等は彼等の思ひ附きを固持してゐる。この晴やかな夜とこの月の光で、臺地から見たら、屹度非常に美しい眺めに違ひないだらうと云ひ張りながら。

——非常に美しい、それは云ふまでもないことである。だが私たちは寢ようとして居たのである。私たちは……。とう〳〵、まあいゝわ、出掛けよう、一

緒に出かけよう、と云ふ事になる。

私たちは町へ下りて、お晴さんの家の前の往來で五人の車屋と俥を傭ふ。お晴さんはこの遲い遠出の爲めに、大きな圓い提灯の、海月や藻や靑鮫の繪をかいた風船形を選つてくれる。

私たちが愈々出かけたのは十一時近くである。中央の町々では、善良な日本人はもう彼等の小さい店を締め、ランプを消し、木の雨戸を繰り、明り障子を立てゝゐる。

そして猶ほ先の、場末の古い町々では、どこも皆もう疾つくから締め切られてゐる。私たちの車は非常に暗い夜の中をころがつて行く。私たちは車屋に叫ぶ。 アヤク！ アヤク！（早く！ 早く！） すると彼等は陽氣に充ちた愉快な動物のやうに、小さい掛聲を發しながら、出來る丈け勢を出して走る。私たちは、五人一列に列んで、でこぼこの古い敷石の上を烈しく動搖しながら、暗

がりの中を旋風のやうにまつしぐらに駈けて行く。そのでこぼこの道は、竹の先にぶら〳〵してゐる私たちの赤い提灯の火でぼんやり照されてゐる。時々、淺葱の手拭を夜の冠りものにした日本人が、幾人も窓を開ける。今頃斯んな大騷ぎをして急いで行く向見ずは一體何者であるかを見る爲めに。さうしてるうちに、私たちが駈けながら投げてゐる微光が、塔の門に坐つてゐる大きな石の獸の一つの獰惡な笑ひを私たちに見せる。……

遂に私たちはこのお諏訪さまの社の下に着く。そして、私たちの車屋をば私たちの小さい俥と一緒に殘して置いて、私たちは今夜は全く人影も見えない大きな段々を登つて行く。

いつも疲れた小娘のやうに、いつも甘つたれて悲しさうな子供のやうにしてゐるクリザンテエムは、イイヴと私の間に挾まつて、私たちの腕にもたれかゝ

りながらのろ〳〵登つて行く。

ヂョンキイユ〔お仙さん〕は、反對に、小鳥のやうに小跳りしながら登つて行く。そしておもしろさうに限りなき段々を數へて行く。

——ヒトオツ！　フタアツ！　ミイツ！　ヨオツ！　彼女は輕快な小さい飛躍を續けて登りながら云ふ。

——イツウツ！　ムウツ！　ナナアツ！　ヤアツ！　ココノオツ！……

そして彼女はこれ等の數を更らに一倍滑稽にする爲めでゞもあるやうに、抑揚に可成り強く力を入れる。

彼女の黑い美しい髷の上には小さい銀のかんざしが輝いてゐる。彼女の横顏は華奢で纖細で、そして極端に異つた處がある。私たちの居る夜の中では、彼女の顏が殆んど醜ともいふべき眼のないやうなものには見えない。

實際、クリザンテエムとヂョンキイユは今夜は小さい妖精のやうである。最

もつまらない日本の女でも、或る場合にはしなやかな風變りと巧みな整ひのおかげで、このやうな樣子にも見えることがある。

夜の空の下に一樣に灰色な、廣大な、人氣のない、花崗石の階段は、私たちの前に高く消えてゐるやうに見える。——そして振り返つて見ると、後は深い淵となつて消えてゐるやうに見える。——深い淵となつて。目のまはるやうな逆落しとなつて。この傾斜してゐる段々の上には、私たちがこれから潜つて行くべき幾つかの樓門の黑い影が伸びてゐる。途方もなく伸びてゐる。そしてその黑い影は、段々の一枚々々に切目が出來て、全體のその廣がりの上に扇子のやうな規則正しい折目を持つてゐる。樓門は飛び〳〵に、重なり合つて立つて居る。——その不思議な恰好は非常に簡單なものでもあればまた稀らしく精巧なものでもある。それが堅苦しいはつきりした輪廓に描かれてゐる。けれども、月の光に照されて非常に大きな物に有りがちなぼんやりした姿に見えてゐる。

曲つた軒縁は二つの恐しい角のやうに兩端に聳えて、星を振り撒いた遠い青い蒼穹の方へ突き出してゐる。その様は丁度、墳墓や亡者で充ちてゐる四周の地中からその深い礎の知り得た物を、その突起に依つて神々に知らせやうとしてゐるが如くに見える。

私たちは小さな一とかたまりになつて今この廣大な登り道の途中に消えてゐる。半分は高い所にある蒼白い月に照され、半分は私たちの手に持れていつも長い柄の先に搖れてゐる赤い提灯に照されながら。

大きな沈默が境内を領してゐる。蟲の音も私たちがだん〳〵登つて行くに從つて默つて了ふ。次第に冷たさが空氣の中に擴がつて行つて、私たちを襲つて來ると同時に、一種落ちついた心持、半ば宗教的恐怖のやうな感じが次第に私たちを捕へて來る。

上りついた所の廣前には、硬玉の馬と陶器の小さい塔があつたが、其處へ這入つて行くと、私たちは何だか氣おくれしたやうな心持になる。其處は塀のせいで餘計暗くなつてゐる。そして私たちが其處へ着いたゝめに、何だか知らないが空氣の精靈たちと其處に列んでゐる様々な目に見える象徴、即ち月の青い光に照されてゐる怪獸や怪物なぞとの間に開かれてゐた神祕な野外集會の邪魔をしたやうに思はれる。

私たちは左手に廻つて、今夜の目的の蟇蛙のお茶屋へ行く爲めに、臺地になつた庭の中を進んで行く。お茶屋はもう締つてゐる。――私はそれを豫期してゐた。――もう締つて眞つ暗になつてゐる。なにしろ此の時刻だもの！……戸口に立つて、私たちは皆んなして一緒に戸を叩く。私たちは媚びるやうな調子で知つてる限りの女中のムスメたちの名前を呼ぶ。マドモアゼユ・トランスパラアント〔透明さん〕、エトアアル〔星さん〕、ロゼエ・マティナアル〔朝露さん〕、それ

からマルグリット・レエヌ〔えぞ菊さん〕の名前を。――誰れも返事がない。――
匂ひ入りの氷菓子も霰の豌豆もさよならだ！……
楊弓場の小家の前で、私たちのムスメたちは怖さうに、急に一方へ飛び退いて、死骸が寢てゐると云ひ出す。――ほんとに、誰かゞ其處に寢てゐる。私たちは用心深く私たちの赤い提灯の薄明りでその場所をあらためてみる。――その死人が怖いから手一ぱいに提灯の柄を差し出して。それはあの年寄りの番人に過ぎなかつた。七月十四日の日に、クリザンテエムの爲めにいゝ矢を選つてくれたあの番人に過ぎなかつた。そしてこの好人物は、髭を少し亂して寢入つてゐる。邪魔をするのが殘酷な位にぐつすりと寢入つてゐる。
臺地の端まで行つて、脚下の港を見下して、それから私たちの家へ歸る事にしよう。
今夜は港が暗い氣味のわるい大きな裂目のやうに見える。其處には月の光が

下りてゐない。地球の臓腑までも屆きさうなほどに口を開いた龜裂のやうである。そしてその底の方には船の灯が小さく、堀割の中の螢のやうに輝いてゐる。

四十七

……眞夜中、曉け方の二時ごろ。私たちの有明はいつも平和な偶像の前に消え〳〵に點れてゐる。……クリザンテエムが俄かに私を起す。そして私は彼女を見つめる。彼女は片肘を立てゝ起き直つて、非常な恐ろしさをその顏に現はしてゐる。默つて、ものも云はないで、彼女は私に相圖をする。誰れかゞ……それとも何物かゞ其處に來てゐる、……斯うして這ひながら、といふことを。
……何といふ薄氣味の惡い訪問だらう？――私まで怖くなつて來た。私は急に

何だか大變な危險が私の身に迫つて來てゐるやうに思はれて來た。此の人里離れた場所で。私がまだその住民と神祕を究め盡さないこの國に於て。また彼女が怖いので半分死んだやうに釘づけになつて、其處にじつとしたまゝ身動きの出來ないのは、伍什を知つてる彼女として、それは隨分恐ろしいことに相違ない。……

それは戸外らしい。庭から來てゐるのである。彼女は震へる手で、今にもお梅さんの屋根づたひに、緣側から來さうだといふことを指し示す。……——ほんとに、輕い足音が聞こえる。——だん〳〵近づいて來る。

私は彼女に聞いてみる。

——ネコ・サン？

——いゝえ！　彼女が云ふ。まだ震へながら、心配さうに。

バケモノ・サマ？——私はもう斯んな丁寧な言葉で云ふ日本の習慣を用ひて

ゐた。

——いゝえ!!……ドロボオ!!

——泥棒だつて！　あゝ！　まあよかつた。泥棒なら、私が先刻急に目の醒めた時心配した幽靈やおばけの訪問より、その方が幾らいゝか知れない。泥棒云ひ換へれば、生きてゐる立派な人間で、疑ふまでもなく日本人だけに滑稽千萬な顏をしてゐるに相違ない。もうすつかり分つてしまつたから、私は一寸も怖くはなくなつた。で直ぐと私たちは眞僞を確めに行かう。——何故と云つて何者かゞお梅さんの屋根の上を動いてゐることは確かだから。……

處を迂路ついてゐることは確かだから。——誰れかゞ其

私は木の雨戸を一枚開けて外を眺める。

私には月の光をまともに浴びた靜かな、澄み渡つた、きれいな大きな廣がりが見えるだけである。蟬のよく響く歌に寢かしつけられて眠つてゐるこの日本

中が今夜は實にうつとりとさせるやうである。そして外のこの大氣を呼吸するのが實にいゝ氣持である。

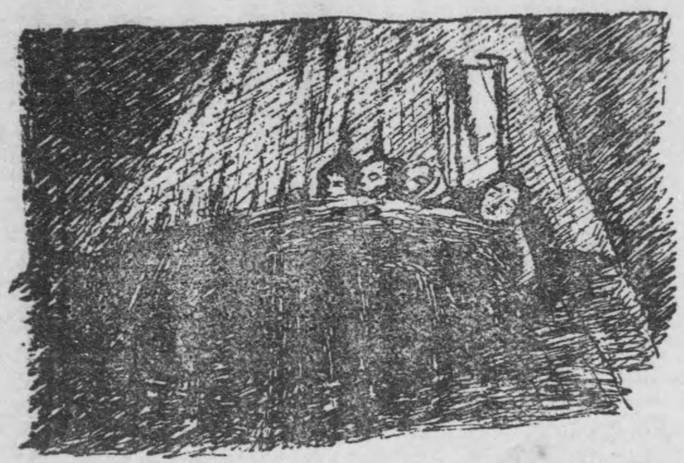
クリザンテエムは私の肩の後に半分身をかくして、震へながら耳をすまして怖氣づいた猫のやうに目を丸くして、庭や屋根を調べる爲めに首をさし伸ばす。……否、何も居はしない。何んにも動いてるものはありはしない……。其處此處に何だか濃い蔭がさしてゐる。一と目見た丈けではよく分らないが、それは垣の端やら、木の枝やらの蔭だといふことがわかつて來る。そして非常にしつかりした靜けさを有つてゐる。何もかも絶體の靜けさに見える。そして月が有らゆる物の上に降りそゝいでゐるこの空漠の中で沈默を續けてゐる。

何んにも居ない。——何處にも何んにも居はしない。これは要するに猫さんたちだつたのである。でなけりや梟のかみさんたちだつたのである。物音は、夜分、私たちの家では、おそろしく大きくなつて行くのである。……

さあ、注意して、念を入れて大事にこの雨戸を締めよう。それから提灯を點けて、若しや何者かゞ隅つこにかくれてゞもゐはしないか、戸締りは嚴重になつてゐるか、どうか、見に下りよう。つまり、クリザンテエムを安心させる爲めに家を一と廻りまはつて見よう。

私たちは、そこで爪立ちになつて、この家のすべての奥まつた引つ込んだ處を一緒に搜し廻る。この家は、その土臺から判斷して、新しい紙で張つた脆弱な仕切りなぞがあるにもかゝはらず、可なり古いものに相違ない。眞つ黑な洞穴みたいな所があつたり、梁に蟲の食つた小さな天井の穴倉みたいなものがあつたり、腐れと黴の匂ひのする米入れの戸棚があつたり、幾世紀の塵の積つてゐる非常に奇態な凹みがあつたりする。眞夜中に而かも泥棒を搜し歩いてるうちに、私の今まで知らなんだ、すべてこれ等の物が不樣な光景を呈してゐる。

私たちは拔き足で私たちの家主夫婦の部屋を横切る。——私の手を引いてる



のはクリザンテエムである。そして私は導かれるまゝにまかせてゐる。――彼等は、彼等の先祖の祭壇の前にともされてゐる燈明に照されて、青々した紗の帳の下に並んで眠つてる。おや！　彼等は可笑しな噂の種にでも上りさうな順序に列んでゐる！――まづ一番がマドモアゼユ・オユキ。非常におとなしい寝方をしてゐる。その次ぎがお梅さん。これは彼女の黒く染めた歯並みを見せながら口を開いて眠つてゐる。彼女の喉からは、牝豚の啼聲みたいな間歇的な音を出してゐる。

……おゝ！　何といふ見つともないざまだらう、お梅さんは!!　――それから、一寸木乃伊になつてるやうな佐藤さん。――そして最後に佐藤さんの側に、列の一番端に、彼等の善良なマドモアゼユ・デデが寝てゐる!!……

彼等の上に垂れてゐる蚊帳は海水のやうな反射を投げてゐる。彼等は水族館の中に溺れてゐる人かなんぞのやうである。そしてこれ等の燈明や、不思議な神道の象徴を以て装はれてゐるこの祭壇が、この家族の畫面にがらにない宗教的な空氣を與へてゐる。

Honni soit qui mal y pense.〔思ひ邪まなる者には禍ひあれ。〕それにしても彼女は、此の若い女中は、なぜ寧ろ彼女の女主人たちの側には寝ないのだらう？　二階の私たちの處では、私たちがイイヴを歓待する時は、私たちは私たちの蚊帳の下で、もつとずつと正しい位置をとるやうに注意してゐる。……

私たちが最後に探しあさることになつた一つの隅が、私に或る領會を感じ

させる。それは低い不思議な押入である。その戸には、廢物かなんぞのやうに、非常に古めかしい有りがたい一枚の繪像が貼りつけられてある。それは雲と火焔の中に坐つてゐる千手觀音と馬頭觀音で、どちらも彼等の奇怪な笑ひで恐しい形相をしてゐる。

私たちはその戸を開けて見る。すると、クリザンテエムが恐怖の叫びを發して、後に飛び退く。——若し私がその時、足早な、音を立てない、一匹の小さい灰色の物が、彼女の上をすり拔けて消えて了ふのを見なかつたら、私は泥棒が其處に居たのだと信じたかも知れなかのた。それは戸棚の上で米を食つてゐた一匹の若い鼠であつた。その鼠がびつくらしたはずみに、クリザンテエムの顏を飛び越して行つたのである。……

四十八

九月十四日。

イイヴが海の中へ彼の銀の呼子笛を落してしまつた。部下の操縱に缺く可からざる彼の呼子笛を。そこで私たちはクリザンテエムと、彼女の妹の雪さんと月さんを連れて、今一つ他の笛を捜しに一日町ぢうをあさり歩いた。

斯んなものを長崎で探し出さうといふのは非常に困難なことである。とり分け日本語で說明するのは困難なことである。海軍の笛としては極つた形で、少し曲つて、先に小さな球が附いてゐて、顫動音を出して、樣々な命令の音の出るやうに出來てる呼子笛なのである。私たちは、三時間も店から店を歩かせられる。——何處の店へ行つも皆んな呑み込んだやうな顏をして、紙の上に筆

で、私たちが其處へ行つたら私たちの必要なものが手に入るに相違ないといふ店の番地を書いてくれる。——そして私たちは希望に充ちて駈けさせて行くと、また新たに欺されて了ふ。息を切らしてゐる私たちの車屋はそれで昏迷してゐる。

私たちが、何か音を出すものを、即ち何か音曲を出すものを欲しがつてゐるといふ事だけは皆んなによく分つてゐる。だから彼等は有らゆる形をした、思ひも寄らぬ、飛んでもない樂器を、私たちに出して來る。道化役者の聲を出すプラテイイク pratique〔道化役者のこわ〕やら、犬笛やら、喇叭やら。それが次第に段々と飛んでもない物を私たちに持ち出ずやうになつて來て、仕舞には吹き出さずにはゐられなくなつて了ふ。最後の店では、一人の年とつた日本の眼鏡師が、いかにも心得顔に何もかも呑み込んでるやうな顔附をして、店裏へ探しに行つて、——そしてどこかの難破船のものだつた濃霧警報器を持ち出して來る。

食後、夕方の重な出來事と云ふのは、私たちの洒落た散歩の歸り道で、お茶屋を出ると驚くべき大豪雨に出逢つたことである。私たちは四五人の誘ひ出したムスメたちを一緒に連れて、大勢のかたまりになつてゐた。そして、出し抜けに如露のひつくら返つたやうに雨が降り出すといふと、私たちのかたまりは早速大混雜を始めてしまつた。ムスメ達は鳥みたいな聲を立てながら逃げ出して、車屋の母衣の下に這入つて、店屋の軒下に避難する。

それから間もなく、店が急いで締められると、人影の絶えた往來には雨水が一ぱいに溢れて、世界が殆ど眞暗になる。紙の提灯はあはれに濡れて消えてゐる。——私はどうしたはずみか、私の從妹のマドモアゼユ・フレエエズ〔苺さん〕と二人で、差し出した軒の下に、壁にぴつたり身體を寄せて取り殘されてゐる。彼女は美しい着物をぬらしたと云つて泣いてゐる。そしてこの町が、私

には急に物悲しい場所のやうに思はれて來る。すべての物に泥水を跳ねながら
まだ降りしきつてゐる雨の音を立てゝ。暗闇の中で小川の咽ぶやうな小さいつ
ぶやきの樋の音を立てゝ。

驟雨は直きに止まつてしまふ。するとムスメ達は、鼠のやうに彼等の穴から
出て來て、探し合つたり呼び合つたりする。そしてムスメたちの小さい聲には、
いつも遠くから呼ぶ時は然うであるが、後を長く引く、物悲しい、獨特な音調
がある。

——おおい、おつきさあーあーあーあーあんん!!

——おおい、おせんさあーあーあーあーあん!!

ムスメたちはお互ひ同士その妙な名前を呼び合ふ。靜かになつた夜の中に、
夕立の後の濕つた空氣の反響の中に、その聲を際限もなく長く引つ張つて。

遂に此の狹い眼をした、頭のない小さいムスメたちは、すつかり見つかつて
また一緒になる。——そして私たちはびしよ濡れになつて十善寺へ上つて行く。

これで三度目でイイヴは私たちの青い蚊帳の下に私たちと並んで寢る。
眞夜中を過ぎて私たちの階下に大騒ぎが起る。それは私たちの家主たちが美
の女神「辨財天?」の遠い殿堂のお詣りから歸つて來たのである。(お梅さんは神
道信者ではあるけれど、この神を尊崇してゐる。この神が彼女の若さを守護し
てゐたといふことである。)間もなくオユキさんが可愛らしい小さな盆に祝福さ
れた糖菓を載せて火箭のやうに駈け上つて來る。殿堂の門の處で私たちの爲め
にわざ〳〵土産に買つて來てくれたのである。そして御利益の消えないうちに
それを食べなければならないのである。私たちは寢ころんだまゝで、——砂糖
と胡椒のはひつた此の小さいものを、何度も禮を云ひ〳〵平げてしまふ。

イイヴは今夜はおとなしく眠つてゐる。手足を襖に打ツつけたりする事なしに。彼は私たちの金光の佛像の片手に彼の時計をかけてある。燈明の光で夜の何時でも時間が正確に見えるやうに。彼は朝早くから起きるのである。よかつたか知ら？——と云ひ〳〵。そして點呼と勤務のことに心を取られながら急いで服をつけるのである。

外は、いふまでもなくもう晝になつてゐる。私たちの木の雨戸の中へ時間が覗き込んでゐたその小穴からは、朝の光が私たちの部屋に差し込んでゐる。そして夜のまだ封じ込められてゐる部屋の中で、その光は白いぼうつとした線を引いてゐる。——今にも、太陽が登ると、この光の線は長い美しい金色になつて行くであらう。——蟬や鷄の啼く聲が聞えて來る。そして間もなくお梅さんは彼女の神祕な歌を始めるであらう。

けれどもクリザンテエムはイイヴ・サンの爲めに提灯に火をつけて、寢捲のま

まで暗い梯子段の下まで彼を見送つて行く。——別れ際に彼等は接吻し合つてるのが聞えるやうにも私には想像される。……日本ではこの位の事は何んでもないのは私にもよく分つてゐる。斯うした事は幾らでもある。そして許すべき事なのである。何處の家でも初めて行つた家で、知らぬムスメにそつと接吻しても、それが爲に咎め立てされることはないのである。——併し氣にかける事はない。イイヴは或る特別な地位に在つてクリザンテエムと相對してゐる。そして彼はそれを私よりもよく理解してゐる筈である。私には彼等がこれまで二人きりでよく家にゐて過した時のことが心配になつて來る。私は、今日となつて彼等を探偵するやうなことはしまい。だがこの事に就いて公明な心を得る爲めに、胸襟を開いてイイヴに話さうと思ふ。……

……下で、突然、ぱち！　ぱち！　干枯びた二つの手を打ち合せる音がする。それはお梅さんが大精靈の注意を引くための拍手である。そして殆んど同時

に鼻に拔ける鋭い作り聲で彼女の祈禱の聲が突發して、突き進んで行く。まるで時間の來た時の目醒し時計が、怒つた堪へ性のない音を發するやうな鋭い聲で。ゆるんで解けて行く旋條仕掛けの機械的な音のやうな鋭い聲で。……

……世界一番の金持ちの女に……。私の穢れをいとも白く。おゝ、アマ・テラス・オオミ・カミ。加茂の川の……

そして此の殆ど人間らしくない震へ聲が、やつと目の醒めたこの瞬間に、はつきりして來たばかしの私の考を迷はせて、そして變更させる。……

四十九

九月十五日。

出發の噂さが立つ。昨日から、我々が支那へ行く、北京灣へ派遣されると云

ふ事が漠然と問題になつてゐる。どうしてだか分らないが、斯んな風説の一つが官命より二三日前に船から船へひろまると、大概それは外づれつこはなかつた。私の小さい日本の喜劇の最後の幕、結末、離別の場は如何なり行くことであらう？　私のムスメの心の中に、或は私の心の中に、少しでも悲しい思ひが起るだらうか？　再び歸ることのない此の最後の瞬間に、少しでも心の緊張が起るだらうか？　私にはそれは、前からは何とも分らない。そしてクリザンテエムに對するイイヴのさよならはどんなものだらう？　この點が何より私には氣にかゝる。……

まだはつきりした事は分らないけれど、兎に角私たちの日本滯在が終りに近づいてゐる事は確かである。——私をして、今宵私の周圍のすべての物の上に今までよりも懐かしい顧眄を投げさせるものは、恐らくそれ故であらう。——六時近くに、私は一日の勤務を濟まして、十善寺へ着いた。非常に低く、殆ん

ど消えさうになつてゐる太陽は、私の部屋一ぱいにさし込んで、佛像や、古い花瓶の中に奇態な花束となつて挿されてある花を照しながら、その赤い金色の大きな光線を横へてゐる。——私の隣人なる五六人の人形たちが其處にゐて、クリザンテエムの三球線の音につれて踊つてゐる。

……そして私はこの家も、踊りを指揮してゐるこの女も、皆んな私のものだと思ふと今宵は實に愉快である。私は、要するに、この國に對して不公平であつた。何だか私にはそんな氣がする。私の目はこの國をよく見る爲めこの瞬間に於て開かれ、そして私の感覺は或る急劇な不思議な變化でも受けてゐるやうに。私は何もかも急に今までよりよく豫知し、今までよりよく了解する。私の生活の周圍に在るやさしい小さな事物の此の無際限をも。形の軟かい美しさと非常な巧妙なことをも。圖案の奇妙な事をも。色彩の品のよい選擇をも。

私は私の眞つ白い疊の上に身體を伸ばす。クリザンテエムは甲斐々々しく私

に蛇の皮の枕を持つて來る。そしてにこ〳〵した他のムスメ達は、たつた今途切らされた彼女等の調子をまだ頭の中でとりながら、調子づいた歩調で私の周りに圓形に集まつて來る。

拇指の處で分れた彼女等の非難する處なき足袋は音を立てない。彼女等の通る時には衣ずれの音ほか聞えない。私には、彼女等を眺めてゐるとすつかり氣に入つてしまふ理由が分る。彼女等の人形じみた樣子が、私を喜ばしたのである。そして私は、この樣子を彼女等に與へる處のものを發見したやうな氣がする。それは單にあのまる〳〵した、表情のない、目と眉毛の非常に籬れた顏許りからではない。それよりも、殊に彼女等の着物の極端に寬濶なことからである。彼女たちは非常に大きな袂をしてゐるから、脊中もなければ、肩もないと云ひ度い程である。彼女等の華奢な身體は此の大きな着物の中に無くなつてゐる。その着物は胴のない小さい人形に着せてあるやうに翻つてゐる。そしてそ

の着物はもし人なみの女の半分位な高さの處で、これ等の絹の廣い帶で留められてなかつたら地面に裾を引きずられたかも知れない位である。――これは、出來るだけ形を、本統の形であれ、うその形であれ、それをそのまゝに現はさうとする、我々の行き方とは、非常に違つた服裝の理解法である。……

その次には、私はクリザンテエムが彼女の日本流の技術で私たちの花瓶に活けてあるこれ等の花をどんなに稱讃するであらう。神聖な大きな、柔らかい、襞のある淡紅色の、磁器のやうな乳色を帶びた淡紅色の蓮の花。それは開いた時は大きな睡蓮に似てゐる。それからまだ蕾の時は青白い長いチューリップに似てゐる。その花の、少し疲れたやうな香氣が、今一つの、何とも評しやうのない匂、即ちいつも到る處に空氣の中に漂つてゐる、ムスメの匂、黄色人種の匂、日本の匂と一緒になつてゐるのである。この季節には珍しい九月の遲咲きは、夏場よりも身長が伸びて、値段も高いのである。クリザンテエムはそれ

を水草の悲しい綠色の大きな葉を附けたまゝにして、なよ〳〵した燈心草の葉を交ぜて活けてある。――私はこの花を眺めてゐると、甘藍の恰好をしたこの圓い花は、佛蘭西では我々の花賣娘たちがレエスや白い紙に包んで賣つてゐる事を思ひ出して或る皮肉を感じる。……

……いつまで立つても歐羅巴からは誰れからも、一通の手紙も來ない。まあ何もかもどんなに消え行き、變り行き、忘られ行く事であらう。……私は今この可愛らしい日本でうまく調子を合せて暮してゐる。私は縮こまつて、樣子ぶつてゐる。私の思想は狹隘になつて行き、そして私の趣味は可愛らしい、ほんの笑はせるだけの事物の方へ傾いて行くやうな氣持がする。私は小さい器用な家具や、人形の使ひさうな机や、飯事用の朱塗りの椀なぞにも慣れて來た。疊の單調な美しさにも慣れて來た。白い木細工の纖巧な飾り氣なしにも慣れて來

た。私は私の西洋的の偏見をさへ失つた。すべての私の思想は今宵蒸發しては消えてゐる。庭を通る時、私は佐藤さんに丁寧にお辭儀をした。佐藤さんは小さい灌木や變り咲きの花に水をやつてゐた。私には、お梅さんまでが立派な過去を有つた十分尊敬すべき老婦人のやうに思はれる。……

私たちは今夜は散歩をよさう。私はたゞこのまゝに寢そべつてゐて、私のムスメの chameeen を聞いてゐたいと思ふ。

今まで私はいつも彼女の guitare と書いてゐた。私が濫用すると云つてよく非難されるあんな異郷趣味の言葉を避ける爲めに。併し guitare と云ふ言葉も mandoline と云ふ言葉も、斯のやうに、長い細そりした柄を持つた、蟋蟀の聲よりも潤ひのある高い音色を出す此の樂器を十分に表はしてはゐない。――これから私はシャメセンと書かう。

そして私は、私のムスメのことをキクとかキクサンとか呼ばう。この名前の

方がクリザンテエムといふ名前よりは一層彼女には似つかはしい。――クリザンテエムといふのは意味を正確にとつて彼女の名前を譯したのである。けれどもその中には音調の奇異な處が保存されてゐない。

で、私は、私の妻のキクに云ふ。

――彈きなさい、私のために彈いておくれ。私は今夜中斯うして、お前の彈くのを聞いてゐやう。

彼女は私がこのやうに機嫌のいゝのを見ると驚いて、少し躊躇ひながら、勝利と誇りの苦い小皺を口もとによせて、繪のやうな恰好で坐つて、くすんだ色合ひの長い袂を捲し上げて、――そして彈き出す。最初のたゆたうてゐるやうな音色は抑へ〳〵微かに音を立てゝ、外の、暑い金色の黄昏の平和な空氣の中で啼いてゐる蟲の音樂にまざり合つてきこえてゐる。端の中は靜かに、いろんなものをまぜこぜに彈いてゐたが、どれもよく覺えてゐないと見えて、その後

を待つてゐても、次ぎが出て來ない。——そして他の小さいムスメたちは、ぞんざいにくす〳〵笑ひ出しながら、踊りの中絶したのを悔んでゐる。彼女は自分だけで義務を果してゐたか何ぞのやうに、氣拔けして、拗ねてゐる。

それから少しづゝ、少しづゝ、調子づいて來ると、ムスメたちも聞きとれて來る。それが熱病のやうに震へ出して急速になる。そして彼女の目つきには、もう人形のやうなつまらなさは全く無くなつてゐる。それが風の音になつたり、醜女の恐しい笑ひ聲になつたり、張り裂けさうな泣きごとになつたり、涙になつたりする。——彼女の見開いた瞳子は彼女の心の內側にある言葉では表はせない日本氣質なものを一心に眺めてゐるやうに見える。

私は横になつて、目を半ば閉ぢてそれを聞いてゐる。心ならずも自づと垂つて來る目蓋と目蓋の間から眺めながら。この高臺から、長崎の上に沒して行く赤い大きな太陽を眺めながら。すると私は、私の過去の全生涯も、地球上のすべての他の場所も皆んな私の前から遠のいて消えて行くやうな憂鬱な氣持になる。黃昏の此の時刻に、私は日本の此の一隅の、この郊外の庭の眞ん中に居て、なんだか家に居るやうな感じがする。——そして斯んな氣分になつたのは今まで一度もなかつたことである。……

五十

丸月十六日。

……夕方の七時。——私たちは今日はもう町へは下りて行くまい。善良な日本の市民のやうに、私たちは此の高い郊外にじつとしてゐやう。

私たちは、イイヴと私は、略服のまゝで、近所の擊劍道場まで見に行かう。

——これは私たちの新鮮な庭と殆んど隣り合つて、私たちの家からつい二三歩

上の方の處にある。

道場はもう締まつてゐた。入口に坐つてゐる一人の小さいムスコが、何度も低く頭を下げながら、私たちの來るのが遲かつたゝめに、もう素人連が皆んな歸つて了つたから、また明日來てくれといふ事を云ひわけする。

夕方は美しく軟かであるから、私たちは家へ歸らないで、そのまゝ當てもなく、山の中を、峰の方へつゞいてゐる小徑を辿つて行く。

私たちの歩きまはつた一時間。——思ひがけない散歩。——そして遂に私たちは非常に高い所へ出た。其處からは晝の最後の光に照された際涯のない遠景が見渡される。何處を見ても佛教徒の小さな墓石の散らかつてゐる所ばかりであるが、私たちは今その墓場の眞ん中の、淋しい物悲しい或る場所へ來た。

私たちは茶の束を脊負つて畑から歸つて來る四五人の遲歸りの勞働者とすれ

違ふ。これ等の百姓たちは顏は少し野蠻で、半分裸體になつてゐたり、でなければ紺の木綿の長い着物を着てゐるだけである。彼等は通りすがりに丁寧に私達にお辭儀をする。

この邊の高地には樹木は少しもない。茶畑があるかと思ふと墓があつて、墓の次ぎにはまた茶畑がある。花崗石で佛陀が蓮の臺に坐つてゐる處を現はした古い像。或はその表に金字の彫刻だけの光つてゐる古い葬ひの石。わけても私たちの周りには岩や、荆棘の生えひろがつた手入れのしてない土地が目につく。

もう誰も通らない。そして暗くなつて行く。私たちは暫く休んで下りることにしよう。

併し私たちの居るすぐ近くに輿のやうな白木の箱が、新に掘り起された土の上に置かれて、その傍に銀紙の蓮やまだ燃え殘つてゐる線香が立てゝある。明かに誰れかゞ、今宵、この下に埋葬されたに違ひない。

私にはその人間を描き出して見る事ができない。日本人は生きてる間は實にグロテスクgrotesqueである。だから死後の平靜な莊嚴な中に彼等を想像して見る事が殆んど不可能である。……まあ、どうでもよい。私たちはこの死人から遠ざからう。私たちが彼を呼び醒すかも知れない。餘りにまだ生々しいから、氣味がわるいほどである。何處か他所へ行つて、塵より外にもう何んにも這入つてないやうな極く古い墓の上に腰をかけることにしよう。そして其處で、もう下の谷や麓の野原は薄暗い影の中に見えなくなつてゐるのに、私たち二人だけがまだ消え殘つてゐる夕日の中に坐りながら、話し暮さう。

私はクリザンテエムの事をイイヴに話さうと思つてゐる。私が彼を坐らせたのは幾らかこの目的の爲めである。でも私は彼の心を傷けない爲めには、又私が嘲笑されない爲めには、どう切り出していゝか分らない。それに、此處いらの純な空氣と脚下の壯大な景色とが、もう十分に私を爽快な氣持にして、私の

懸念とその原因に對して、一種輕蔑的な憐憫の情を起させてゐた。……

私たちはまづ初めに、支那か佛蘭西へ向けて、いつ出帆命令の下るかわからない事を話し合ふ。私たちは直きに此ののんきな、先づは樂しいと云ひ得る生活を見棄てなければならないだらう。偶然にも私たちの逗留することになつてゐる日本のこの郊外を見棄てなければならないだらう。そして花の中の私たちの小家を見捨てなければならないだらう。イイヴはこれを私以上に殘り惜しく思ふだらう、といふことは私にはよくわかつてゐる。なぜといふに、彼にとつては、斯のやうな間幕が彼の荒つぽい坐涯の單調を破つたのは初めてゞあるから。以前、彼が下級の階級にあつた頃は、沖の鷗のやうに彼は異鄕の土地へは殆んど決して上陸した事がなかつた。併るに私は、初めから有らゆる種類の國の、この小家よりもずつと立ちまさつた愉快な小家で、墮落させられてゐる。その思ひ出に私は今なほ心惑うてゐる。

そして私は分明にする爲めに危險を侵して彼に聞く。

——君は僕よりもつらいだらうな？　あの女と別れるのが。あの小さいクリザンテエムと別れるのが。……

沈默が私たち二人の間を支配する。

それから私は私の脈管の血を燃やしながら、更らに附け加へて云ふ。

——君には分るだらうが、若しあの女がほんとうに君の氣に入つてるとしたら……、僕があの女と結婚してるのぢやない。あの女を僕の妻と思ふことはできない。……

非常にびつくらして彼は私を眺める。

——あなたの奥さんでない、と仰しやるんですか？　——いゝえ！　そんなことがあるのものですか。……分りきつたことぢやありませんか。あの人はあなたの奥さんですもの。……

私たち二人の間では、いつだつて、長いことを云ふ必要は決してない。私は今、彼の言葉の調子からも、彼の氣さくな善良な微笑からも、すつかり得心が行つた。『わかりきつたことぢやありませんか。あの人はあなたの奥さんですもの。……』と云つた此の一寸した言葉の中にあるものが私には皆んな分つて了つた。若し彼女が私の妻でなかつたら、おゝ！　その時は、どんな事にならうとも、彼は決して答へなかつたであらう。——彼自身の心の底にはどんな後悔が起らうとも。だつて彼はもはや未婚男子でもなければ、また昔のやうに自由な身の上でもないから。——併し彼は彼女を私の妻として考へてゐる。だから神聖である。私は彼の云つたことを此の上もなく十分に信じてゐる。そして私は過ぎ來し日の私の善良なイイヴを見出して、眞の慰安、眞の喜悅を感じる。それに私は如何して、彼を疑つたり、また此のような卑劣な懸念を起したりするほどに、つまらない周圍の影響を受けたのであらう？……

もう二度と再び話すまい、あの人形に就いてだけは。……

私たちは遲くまで其處に居て、其間脚下の谷や山が、大きな奥深さの底に、暗くなり消えて行くのを眺めながら始終他の話ばかりしてゐる。私たちは澄み渡つた大氣の中の、大變に高い處にゐるから、この可愛らしい日本からは、もう出發してしまつたやうな氣持がする。また私たちの心に生じてゐた小さい印象からも、私たちを引きとめやうとしてゐた小さい束縛からも、もう解かれてしまつたやうな高い所から見ると、地球上のすべての國は皆んな似寄つた所がある。どこの國も、その上に、人間といふもの、國民といふものによつて、即ち地上にうよ〳〵してゐる原子に依つて印せられたる特徴を失つてゐる。

昔、英領の土地に居た時のやうに、トゥルヴァンの森に居た時のやうに、或は

海上で夜の勤務をしてゐた時のように、私たちの話は、暗闇の中で自然考へられるやうな事柄に移つて行く。即ち幽靈とか、靈魂とか、未來とか、あの世とか、虚無とか。……

あの小さいクリザンテエム、私たちはすつかりあの女のことは忘れてゐた！

星明りの夜を私たちが十善寺へ着いた時、彼女のことを私たちに思ひ起させたものは、遠くからきこえる彼女のシャメセンの音樂であつた。彼女は弟子のオユキさんと聲を合せて何かの哀歌を稽古してゐた。

私は今宵大變い〻氣持である。私の可哀さうなイイヴに就いての不條理な懸念はもうなくなるし、日本に於ける私の最後の月日を思ふま〻に樂しんで、出來る丈け面白く暮さうと考へてゐるから。

私たちは新しい疊の上に横になつてこの二人のムスメの奇態な duo〔連奏〕を聞かう。悲しいゆつたりした一種の mélopée〔組歌〕が二撥三撥の高い調子

で初まる。――それから一句々々、殆んど聞きとれない位に、その調子が沈んで行つて、非常に嚴肅な調子になつて了ふ。唄は始終その長引く徐けさを失はないでゐる。併し伴奏は次第に調子を高めて、遠くの疾風の音を聞くやうである。果ては、いつもの優しい娘の聲が、どす太い嗄れ聲となり、クリザンテエムの手は震動する絃の上を、痙攣けてるやうに狂亂したやうに動き出す。娘たちはこの驚くべき深い調子をしぼり出す爲めに、二人ながら頭を低くたれ、下唇を歪めてゐる。そしてこの時になると、彼女等の細い目は開かれて、この人形の衣裳の下に包まれた殆ど魂とは云へないやうな或物を外に現はさうとしてゐるやうに見える。

併しそれは、今までよりも餘計に私の魂とは懸け離れた別の種類のものゝやうに私には思はれる。私は私の思想が例へば鳥の變幻極りなき想念や猿の夢想なぞから隔つてゐるほどに、此の娘等の思想から隔つてゐるやうな感じがす

る。私は此の娘等と私との間には、神秘的な恐しい深淵があるやうな感じがする。……

外の遠い處から來る今一つの音樂が、このムスメ達が私たちのために彈いてゐる音樂を暫らく中止させる。

それは私たちの下の方の、長崎の町の、深い底の方から急に起つて來る鉦や三味線の音である。――私たちはそれをもつとよく聞きとる爲めに緣側の欄干まで駈けて行つてもたれかゝる。

マツリ、卽ち一つの Fête〔祭禮〕である。卽ち行列が通るのである。――『いろ町』を通るのだと私たちのムスメ達が、口もとに輕蔑の小皺を寄せて然う云ふ。――併しその町は私たちの住んで居る高臺からおぼつかない星影で、一と目に見下すと、非常に清淨な眺めである。其處で始まつてゐる合奏はその深い谷底から私たちの處まで上つて來るうちに淨められて、少し息づまるやうな、

こんがらかつた、魔術のやうな、魅するやうな音になつて聞えて來る。……

……それが遠くなつて、靜まつて行く。……

すると二人の小さいお友だちは座に歸つて、再び彼女等の悲しい duo（連れ彈）を始める。——こほろぎと蟬の orchestra が、聲をひそめてはゐるが數限りなく啼き立てゝ、その tremolo（顫動音）で娘等に伴奏をする。——日本中の土地で止むことのない、甘い、永久の、あの果ても知らぬ大きな tremolo で。

五十一

九月十七日。

午睡時間に、俄かの命令が下つて、明日支那へ向つて、芝罘（北京灣の中に在るひどい場所）へ向つて出帆することになつた。私に知らせに、私の船室に

來て私を呼び醒したのはイイヴである。

——私は今夜はどうあつても失敬して上陸しなきやなりません。彼が云ふ。私が一生懸命私の眠りを振ひ落してゐる間に。——先づ何よりも、あなたの爲めに彼處へ行つて引越しの手傳ひをしなけりやなりません。……

さう云つて彼は私の船室の窓越しに、青々した頂上の方へ頭を上げながら、山の襞に隱れて見えぬ十善寺と、よく鳴り響く私たちの古い小家の方角を眺める。

彼處へ行つて彼が私の引越しを手傳はうと云つてくれるその心は實にやさしい。けれども私は彼が日本人の小さい友だち達に別を告げやうと考へて居ることも信じてゐる。そして私は實際それに對して彼をわるいとは思へないのである。

彼は仕事を片づけて、そして、操練と演習がすんだら、夕方の五時から上陸してよいといふ許可を、私の助力を借りることなしに得る。

私の方は、貸サンパンで直ぐに出かける。

眞晝の大きな日光の中を、蟬の震へ聲を聞きながら私は十善寺へ登つて行く。

小徑には人通りがない。草木は暑さでうなだれてゐる。

けれどもマダアム・ヂョンキイユ〔お仙さん〕が散歩してゐる。蠅の光る此の日中に。骨の多い、きれいな色の、大きな日傘の輪の下に、彼女の華奢な身體と美しい顏を隱しながら。

彼女は遠くから私を認めて、いつものやうにこ〳〵しながら私の前へ駈けて來る。

私は彼女に私たちの出帆の事を知らせる。——すると彼女は大きく口もとを

歪めて、子供のやうな顏をする。……では彼女はこの事を眞實悲しんでゐるのか？……彼女は泣かうとしてるのであらうか？……——否！　否！　それは少し仰山な笑ひに變つて行く。勿論少し神經質らしい、けれども思ひがけない、無頓着な笑ひに變つて行く。——から〳〵して澄み透つて、暑いこの山徑の沈默の中を寶物の小さい眞珠のころがり落ちるか何ぞのやうに。

あゝ！　だがまあいゝ、これで結婚も大した心配なしに途斷れてしまふことであらう！——この孔雀。彼女は彼女の笑で私を我慢出來なくする。そして私は彼女に春中を向けてまた歩きつゞける。

クリザンテエムは二階の疊の上に横になつて眠つてゐた。家はすつかり開け放されて、山のなま溫い風が部屋を吹き通つてゐる。

恰度私たちは今夜お茶を立てることになつてゐた。そして私の指圖に從つて

花はそこにも此處にも飾られてある。それから私たちの花瓶には蓮の花が活けてある。淡紅色の美しい蓮の花が。今度こそはこれが季節の最後の蓮の花だと私は思ふ。——彼女等があの下の方の、あの大きな神社のある町に住んでゐる專門の花屋へそれを注文して置いたに違ひない。大變な費用が私にかゝつて來る事だらう。

團扇で輕くぱた〳〵と叩いて、私は驚くこの小ムスメを目醒す。そして私は私がどんな印象を與へるかに就いて好奇心を持ちながら、出帆のことを彼女に告げる。——彼女は起き上つて、重たい目蓋をその小さい手の裏で擦る。悲哀の情のやうな何ものかゞ彼女の眼の中を通り過ぎる。

これはイイヴの爲めである、疑ひもなく、この小さい心の惱みは。

知らせが家中に擴まる。

オユキさんは兩方の目にあかんぼのやうな涙を半分ためて、あたふたと上つて來る。彼女は彼女の赤い大きな唇で私に接吻する。その唇は何時も私の頬の上に濕つた輪を描くのである。——

それから急いで彼女の長い袂から四つ折りにした紙を引き出して、そつと、流した涙を拭き、彼女の小さい*方に暮れた樣子を續けてゐる。この老婦人は一體どうしたと云ふのだらう。何だつて斯のやうに彼女は私に接近して來るのだらう、私が振り返へると私の邪

*鼻をかみ、紙ぎれを丸くまるめ、——そしてそれを往來の通行人の日傘の上へ投げ出す。

次ぎにお梅さんが現はれる。興奮して取り亂して、全く途

魔になるほどに近く寄つて來るのだらう?? ……

この最後の日に、私はまだしなければならない事が目まぐるしいほどある。骨董屋の處へ、用達人の處へ、荷造屋の處へ、と車屋を走らせる。

けれども、私の部屋を取り片附けさす前に私はそれを寫生して置きたいと思ふ……昔、スタンブウルでしたやうに。……實際此處で私のするすべての事は、眥て私が彼處でやつた事の苦い嘲りのやうに思はれる。……

けれども今度は、何もこの住家に未練があるからではない。たゞ此の住家が可愛らしくつて、變つてゐるからである。この寫生を保存して置くと興味があるだらう。

で、私はアルバムから一枚を引き放して、疊の上に坐つて、盞を浮き彫りにした机に凭つかゝつて、直きに描き始める。——すると私の後ろには三人の女が、すぐ近くに、すぐ近くにくつ附いて、驚きの注意を以て私の鉛筆の動いて

行く跡を追うてゐる。日本の美術は全く convention である所から、彼女等はこれまで實物を寫生するのを見た事がなかつたのである。そして私の樣式は彼女等を喜ばす。

私には可憐な鶴の群れを描く時の佐藤さんの遲筆の確かさも輕妙さも多分ないだらう。併し私には彼に缺けてゐる遠近法の總念が幾らかある。そして私は物を描く時うまく趣向をこさへたりひねくつ

たりした風にしないで、見た通りにそれを描き出す法を知つてゐる。だからこの三人の日本の女は私の下畫の寫實風なのに驚いてゐる。

嘆賞の小さい叫び聲を發しながら、彼女等は物の形や影が黒く私の紙の上に描かれて行くにつれてそれを指先で示し合ふ。クリザンテエムは新しく興味のきざした顏附をして私を見つめる。

——アナタ、イチバン！　彼女は云ふ。(文字通りに云ふと "Toi premier!" 〔あなたが一番です！〕即ち斯う云ふ事を意味してゐる。『あなたがほんとうに一番偉いお方です！』)

オユキさんはこの評價を尙ほとせり上げて、熱心の興奮の中で叫ぶ。

——アナタ、バカリ！　("Toi seul!" 〔あなたゞけ！〕即ち『あなた見たいな方は世の中に一人もありません。他の人たちは皆んなあなたのお側では、ねうちのないやくざ者に過ぎません。』)

お梅さんは何んにも云はない。併し彼女がそれ以下に考へてない事は私にはよく分つてゐる。彼女の氣倦さうな樣子と、ちよいと私の手にそつと觸つたその手が、先刻彼女の途方に暮れた顏附を見た時私の懷いたあの觀念を首肯させる。即ち明かに私の肉體のすべてが、年頃は過ぎても小說じみてゐる彼女の想像に話しかけるのである！　——私は彼女を知ることが遲過ぎた後悔を懷いて去らなければなるまいと思ふ!!……

この女たちは、私の寫生に滿足してゐても、私の方では滿足してはゐられない。私はすべてのものをその位置に可成り正確に置いた。けれども全體として何んだか平凡で、しつくりしないで、佛蘭西風になつて、どうもうまく行かない。氣分が出てゐない。私は日本風の遠近法をつけて、その上、珍らしい事物の輪廓をば極度まで誇張したのに、何故もつといゝ效果を齎し得なかつたので

あらうかと怪まれる。それから、畫になつた住居には、その壞れやすさうな風と、かさ〳〵したヴィオロンのやうな響き易さが缺けてゐる。木造を現はした鉛筆の線には、組立の小さな細かさも出てなければ、極度の古めかしさも、完全な清潔さも、乾き切つた幾百年の夏をその木造がその纖維の中に蓄積して置いたやうな蟬の顫動音も現はれてゐない。此處にゐて人が感ずるやうな印象は現はれてゐない。卽ち町の雜沓を下に見下して、樹木の間の、高臺の、遠い郊外にゐるやうな印象は少しも畫の中には現はれてゐない。否、すべてこれ等のものは描かれることは不可能であり、現はされることは不可能であつて、寫し得ざるもの、捕へ得ざるものとして存してゐるのである。

……もう招待を出してあるのだから、私たちは何を措いても今夜はお茶の會をしよう。

だから、別れのお茶の會は出來る丈け派手に列べ立てよう。その上、振舞をして異鄕的生活の結末を附けるのは私の慣例の一つである。他の國々に於ても私は然うしたのであつた。

私たちは常連を呼ばう。その外に、私の義母、私の親戚、最後に町のすべてのムスメ達をも呼ばう。併し日本風の贅をつくす事にして、今度は歐羅巴の友達は誰れも仲間入りを許すまい。――あの途方もなく脊の高い友達だつて許すまい。――イイヴ丈けは寄せてやらう。それも、花や美術品の後ろの隅つこに隱れるやうに坐らせて置く事にしよう。

最後の夕日と同時に、最初の星のきらめきと同時に、婦人達が、鄭寧なお辭儀をしながら這入つて來る。すると間もなく私の小さい家は坐つてる小さい女たちで一杯になつて了ふ。彼女等の細長い目は當て度もなく微笑してゐる。念

入りに結つた彼女等の美しい髪毛は、研き立てた黒檀のやうに光つてゐる。彼女等のしなやかな身體は大き過ぎる着物の襞の中にかくれてゐる。今にも落こちさうに痩せぎすな小さい脊中の上に欠伸をして、美しい頸足をあらはに見せてゐるその着物の中にかくれてゐる。

少し憂鬱なクリザンテエムと愛嬌たつぷりの私の義母のルノンキュウル〔おきんさん〕は、小さい煙管で煙草を吸つてゐる此の人々の間を忙がしさうに立ちまはつてゐる。やがて、何んにも別に意味のない、はつきりしたひそめき笑ひが、大變にやさしい異郷的な調子を帶びて聞え出す。そしてそれから綺麗な漆塗りの煙草盆の緣へ鋭く早く打ちつける、パン！　パン！　パン！　が始まる。酢漬にして匂を入れた果物が奇妙な形をした盆に載せられて皆んなに順々に配られる。その次ぎに卵を二つに割つた位の大きさの、透明な磁器の碗が現はれる。そして人形の使ひさうな急須にはいつた砂糖ぬきのお茶の數滴が婦人達に

出される。——またサキ（米から製した酒精で、溫められて用ひられる。鷺のやうな頸の長い德利にはいつてゐる。）の少量も出される。

ムスメ達が代る〳〵、シャメセンの improvisation〔即興演奏〕をする。他のムスメ達が熱狂した蟬のやうに、引切りなしに跳ね上りながら鋭い高い調子で歌ふ。

お梅さんは、長い間抑へつけて心を騷がしてゐた情緒をもはやこれ以上包んで置く事が出來ないで、やさしい心遣ひをで私に侍いてゐる。そして私に澤山の優美な形見を受けて貰ひ度いと云ふ。卽ち肖像。小さい花瓶。サツマ燒の小さい月の女神。非常に怪異な人形なぞを。——私は震へながら彼女の後について薄暗い隅の部屋へ行く。お梅さんはこの贈物を二人きりになつて渡さうと思つて私の手を引いて其處へ行くのである。……

九時頃、衣ずれの音をさせて、長崎で流行つてゐる三人のゲエシャ。マドモア

ゼル・ビュルルテエ〔薄〕、オランヂュ〔蜜柑〕及びブランタン〔春〕が來る。私が一人前四ピアストル〔一ピアストルは約三錢〕で傭つたゲエシャたちである。――これはこの國では法外の値段なのである。

この三人のゲエシャ達は、私の着いた雨の日に百花園の薄い襖を隔てゝ歌ひ聲を聞いたあの小さい嬢たちである。併しあの時分から見ると私も大分日本化してゐるから、彼女等は今日は餘程つまらなく、珍らしさもずつと減つて、ちつとも神秘的なぞに見えはしない。私は彼女等を寧ろ私の注文に應じて傭はれた踊り子として待遇する。そして私がこの中の一人と結婚しようと考へてゐたことを思ふと、今となつてはぞつとするほどである。――以前勘五郎さんがよく私をぞつとさせたやうに。

ムスメたちの息づかひや燃えてゐるランプのせいで起つたひどい熱氣が、蓮の花の香を擴がらせて、重苦しくなつた空氣を一ぱいに充たす。そして彼女等

の髪毛を光らせる爲めにどつさり附けられた椿の油の匂もする。

小さくて可愛らしい子供ゲエシャのマドモアゼル・オランヂュ〔蜜柑〕は、その唇の緣を金色に塗つて、奇態な鬘をつけ、木や厚紙で出來た假面をかぶつて面白い足柏子を踏む。彼女は貴重な美術品で、有名な美術家の署名のある上品な老女の假面をかぶつて、昔風に仕立てられた見ごとな長い衣裳を着ける。その裾には厚いものが塡めてあつて、衣裳の動きにつれて、何だかこはばつた不自然な、併し似合はしい動作を與へるやうになつてゐる。

生溫い微風が緣側から緣側へ部屋の中を吹き拔けて、ランプの灯をはためかせる。人爲的の熱氣で凋んで來た蓮の花がこの風に散つて、どの花瓶からもばらばらに落ちて、その大きな淡紅色の花片が、蛋白石の盞の碎片のやうに客人たちの上に飛び散らかる。……

お仕舞までとつてあつた聞きものは長たらしい單調なシャメセンの ぎ.ぉ〔三

部合奏」であつて、これはゲエシャ達が一番高い糸で、急速な pizzicato〔調子を引締める所〕で鋭くそれを彈くのである。——その音色は常住不斷に啼いてゐるあの蟲の聲卽ち木からも、古い屋根からも、古い壁からも、有らゆる物から起つて來て、日本の凡ての騷音の基調になつてゐる、あの永久の蟲の歌の精髓であるかと思はれる。——若し云ひ得べくんば、またその分解でもあり、またその廓大であるかとも思はれる。……

十時半。番組が濟んで、振舞も終りとなる。最後に皆んな一樣にパン！　パン！　それから小さい煙管は帶の間へ仕舞ひ込まれてある彫物をした筒に收められる。ムスメ達は立ち上つて出かける。

赤、鼠、靑の澤山な提灯の短い釘の先に灯がともされる。そして限のない挨拶がすむと、客人たちは皆んな小徑と植込の暗がりの中に消えて行く。

私たちも、卽ちイイヴとクリザンテエムとオユキと私と、此の四人で私の義母、義妹たち及び若い叔母のマダアム・ネニュファル〔睡蓮（お蓮さん）〕を見送りに町まで降りて行く。

それから私たちは皆んなしていつも行きつけの揚所へ最後の散歩をして、お茶屋の Papillons indescriptibles〔形容の出來ぬ胡蝶〕で菓子を今一度食べて、お晴さんの店で今一度提灯を買つて、そしてお時さんの店でいつものお菓子を食べようとも思つてゐる。

私はこの別れて行くことに成るたけ印象を深くして、成るたけ感懷を強くしようと努めて見たが、それは駄目である。この日本では、この國に住んでゐる小さな男女も然うであるが、確かに或る本質的のものが缺げてゐると思ふ。通りすがりに樂む事は出來る。けれども此處に愛着の心は起らない。

歸りはまたイイヴと二人のムスメと一緒になつて、恐らくは再び見る事のあるまいと思はれる十善寺の坂を今一度登つてゐると、取りとめのない憂鬱が私の最後の散歩に沁みわたる。

けれども、それは、返ることなしに終るべきすべての物に避けられぬ憂鬱である。

その上、この靜かなきらびやかな夏も、私たちに對して終りを告げやうとしてゐる。――明日から私たちは北部支那へ向つて、秋の先駆をすることになるのである。そして私はまだ私が望みを掛け得べき若い夏の數を數へて見る。私は夏が一つづゝ消えて行つて、有らゆる過去の物の埋まつてゐる暗い底知れぬ淵の中へ姿をかくしてゐる他の夏の間に飛び込んで行くのを見ると、その度にだん〳〵と陰氣になるやうな心持がする。……

夜中に私たちは家へ歸つて來る。そして私の引越しが始まる。その時、船中では、お話のやうに青の高い友達が親切にも私の代理に勤務を取つてくれる。

夜中の、大急ぎな、こつそりした引越。――『ドロボウのやうな』とイイヴは云ふかも知れぬ。ムスメ達とのつきあひで幾らか日本語の通人になつたイイヴに云はせれば。

荷造屋諸君は私の頼みに應じて、夕方、仕切りのした底の外せる可愛らしい數個の小箱と、それから數個の紙の袋を送り屆ける。此の紙の袋は（裂けない日本紙で出來て）ひとりでに締つて同じ紙で出來た紐で結ばれるやうになつてゐる。この種類のものでは一等巧みに、一等手頃に出來てゐる。實用的の小さな物にかけては、この國民に及ぶものはない。

内で荷造りしてゐる處は面白いものである。そしてイイヴ、クリザンテエム、お梅さん、お梅さんの娘、それから佐藤さん、と皆んなが總がゝりで手を貸す。

まだそのまゝにともつてゐる振舞ひのランプの光りで、皆んなが包んだり、轉がしたり、括つたりする。――もう遲いから大急ぎである。

オユキは重い心は持つてゐるけれど、時々堪らなくなつて無邪氣な高笑ひを交へて仕事をしてゐる。

涙に浸つてゐるお梅さんは、もう感情を抑へることが出來なくなつてゐる。氣の毒な女、私は實に殘念なことに、……

クリザンテエムはぼんやりして、默つてゐる。……

それにしても大變な荷物である！　佛像や怪像や花瓶の數が箱や包で十八個――その外に猶ほ淡紅色の束にして私の持つて行く最後の蓮の花がある。

これが皆んな夕方偃つて置いた車屋の車に積まれる。車は門口に待つてゐると、車屋たちは芝生の上に眠つてゐた。

星の輝く濃やかな夜。――私たちは、提灯をともして、三人の悲しさうな見送りの女を連れて出掛ける。そして暗がりでは危ない急な坂を、海の方へ下りて行く。……

車屋たちは彼等の筋張つた脚を突つ張つて、力一杯に支へてゐる。若し放つて置いたら、この荷物を載せた車はひどい速力でひとりでに落ちて行くであらう。そして私の最も貴重な骨董品と一緒に宙に投げ出されてしまふであらう。

クリザンテエムは私の傍に寄り添うて歩きながら、あのうそのやうに脊の高い友達が朝まで夜通し私の代理をしてやらうと云ひ出さなかつたから、私がこの最後の一夜を私たちの屋根の下で過されないのが殘念であるといふことを、彼女の甘いやさしい素振りで私に話してきかせる。

――ねえ。　彼女が云ふ。　明日の晝間、まだ船の出ない内に、今一度歸つて來て頂戴な。わたしにさよならを云ひにね。あたし日が暮れてからお母さん

の處へは歸るわ。入らして下さつたら私まだ彼處に居ることよ。
で、私は彼女にそれを約束する。

灣がすつかり一と目に見える曲り角まで來ると彼女等は立ち止まる。遠い無數の灯影を映してゐる黑い眠つた海。そして船——私たちの處から見ると魚のやうな形をした動かない小さいものに見えて、それも矢張し眠つてゐるやうな船。——此の小さい物は何處へでも私たちを運んで行く。どんな遠い處へでもそして忘れてしまふやうに。

三人の女たちは引き返へさうとしてゐる。夜はもう餘ほど更けてゐるし、それに下の波止場に近い居留地の町々は、こんな時刻には安全でないから。

そこでイイヴには——もう再び上陸する事のないイイヴには、——彼の友だちのムスメたちに最後の別れを告げるべき時が來たのである。

私は、イイヴとクリザンテエムとの間の別れに大變な好奇心を抱いてゐる。私は耳をすまして聽き、眼を見張つて見つめてゐる。——それは最も簡單な最も靜かな有樣で濟んでしまつた。お梅さんと私の間の避け難い胸苦しい思ひなぞは少しもない。私のムスメの心の中には、冷淡な、無頓着な所があつて、それが私を惑はせてゐる。實際私はそれが何であるか、もう分らなくなつた。

そして私は海の方へと下りて行きながら獨りで考へつゞける。『彼女の悲しさうなあの樣子は、ではイイヴの爲めでもなかつたのだ。……ちや誰の爲めなのだらう？……』それからあの小さい言葉が私の頭の中をまた過ぎ去る。

『明日船の出ない內、わたしにさよならを云ひに歸つて頂戴な。あたし日が暮れてからお母さんの處へは歸るわ。入らして下さつたら私あそこにまだ居ることよ。……』

今夜は日本が實に愉快である。實に新鮮で氣持がよい。そしてあのクリザン

テエムまでが實に可愛らしかつた。先刻私と列んであの坂道を默つて歩いてゐた時は。……

私たちが貸サンパンに沈みさうなまで箱を積み込んで、ラ・トリオンファントへ歸り着いたのは二時頃である。非常に脊の高い友達は勤務を私に讓る。私はそれを四時までつゞけなければならぬ。そして當番の水兵たちは、半分眠りながら、暗闇の中で一列に順送りに手渡しで私の毀れ易い荷物を全部甲板に上げて了ふ。……

五十二

九月十八日。

私は昨夜の寢不足の埋め合せに今朝は遲くまで眠るつもりであつた。

ところが八時頃になると、奇妙な顏附をした三人の男どもが勘五郎さんの案内で私の船室の戸口に現はれて、のべつにお辭儀ばかしゝてゐる。彼等は黑い模樣のついた長い着物を着て、大きな髮と高い額と美術に熱し過ぎた人の貧血症な顏をしてゐる。そして彼等の髷の上には、いやに氣取つた恰好で、横ちよに冠つた英古利形の鍔廣帽がのつかつてゐる。彼等は下畫の一ぱい入つた紙挾みを小腋にかゝへて、手には繪の具箱に繪筆、それから細い針の、尖の鋭く光つたのを束ねて持つてゐる。

私はまだ目を醒ましたばかしで目がちらくしてゐたが、それでも一と目でこの人達の樣子を見てとつて、どう云ふ用向で來た人たちであるか、直ぐに分つた。

——おはいんなさい。　文身屋さん！　私は云ふ。

これは長崎で最も有名な専門の人たちである。私は出發するやうにならうとは知らないで二日前から頼んで置いたのであつた。そして、彼等が來た上は、私は逢つてやらうと思ふ。

太洋洲やその他の場所で原始的な人間と交際した結果、私は文身に對する嘆かはしい趣味を持つやうになつた。私はまた比類のない針先の巧を持つた日本の文身師の仕事の見本として、珍物として、骨董品として、私の身につけて持ち歸へらうと思つてゐた。

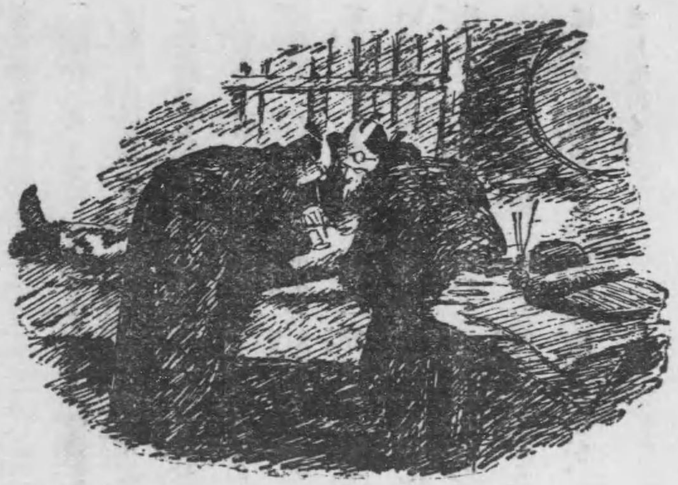
私の机の上に並べられた彼等のアルバムの中から私は自分の好きな分を選り出す。その中には人間の身體のいろんな部分々々に應じて面白い下畫が幾つもある。腕や足に彫るべき寓意畫。肩に彫るべき薔薇の枝。脊中に彫るべき大きな犠め面、それからまた、――外國軍艦の水兵のお客さんの趣味を滿足させる爲に、――武器の戰利品。亞米利加の國旗と佛蘭西の國旗を組み合せたもの。

星の輪の中に圍まれた God Save（英國國歌）、――それから le Journal amusant（佛蘭西の通俗雜誌）の中で評判のグレヴァン（佛國近代の圖案家）のスケッチから取つた女の繪！

私は青い獅子と長さ二寸許しの非常に珍しい淡紅色の薔薇（牡丹？）を選る。この薔薇を私の胸の上に心臓と向ひ合せに刺れさせたら見ごとであらう。

疼みと苦しさの一時間半。私は寢臺の上に寢ころんで、この人達の手に打ち委せて、私は彼等の極微な針痕の幾千の爲めに身體が剛張つてゐる。若しかして少しでも血が滲んで、一筋の赤色でその繪がよごれると、その中の一人が急いで唇でその血をとめる。――そしてこれが日本流であつて、醫者が人間や動物の傷口を塞ぐ時に用ひる方法だと知つたから、私は云ふなりになつた。

彫刻家が石に細工をした製作品のやうに、精巧な緻密な細工が私の身體の上に徐々に施される。彼等の疼せた手が、氣どつた自働的な手振りで私を彫り惱まして行く。



とう〳〵おしまひになる。——そして文身師たちは滿足げな樣子でもつとよく見る爲めに後退りして、これは美しくなるでせうといふ。

大急ぎで、私は上陸する爲めに服をつける。——日本に於ける私の最後の時間をよく利用する爲めに。

今日は恐ろしい暑さである。九月の或る眞晝の太陽が黃いろくなりかけた木の葉の上に物憂げに照してゐて、もう朝間は涼しくなつて來た其の後のあか〳〵と燃きつけるやうな

眞晝である。

昨日のやうに、正午の睡くなる時刻を、私は光線と沈默のみに充たされた人げのない淋しい小徑を、私の高い郊外へと登つて行く。

私は音のしないやうに私の住家の戸を開ける。私はお梅さんが怖いから、此上もなく用心深く爪立てゝ這入つて行く。

梯子段の下の、白い靜の上に、いつもこの玄關に脫ぎ捨てゝある小さい下駄と小さい草履の側に、出かけるやうに用意した荷物のすつかりまとまつてゐるのが、一と目でそれと分る。いつも見馴れた黑つぽいきれいな着物が丁寧に疊まれて、四隅を結かれた淺葱の風呂敷に包まれてある。——私はこれ等の包みの一つから覗き出してゐる手紙や形見を入れた箱の片隅を見つけた時に、取りとめもない悲しさの印象を感ずるやうな思ひがした。——その中には上野で撮つた私の寫眞が、今はムスメたちの樣々な顏と一緒に這入つてゐる。——これ

も出かけるやうに用意した長い棹の付たマンドリイヌの一種〔三味線〕が紋絹の袋に這入つて荷造りの山の上に置かれてある。——それが何だか或る giptane〔ジプシイ〕の引越しのやうだ——と云ふよりも寧ろ、それは私が子供の頃持つてゐた或るお伽噺の本の中の一つの繪を私に思ひ出させる。それは夏中啼き暮してゐた「蟬」がお隣りの「蟻」を訪ねて行く時にその脊中に脊負つてゐたのと全く同じ樣な荷物と長いギタアルである。

可哀さうな小さな荷物！……

私は爪立てゝ梯子段を上つて行く。——そして私は上の部屋で歌つてゐる聲を聞いたから立ち止まる。

それはまさしくクリザンテエムの聲である。しかも快活な歌である！　私は面喰つて、ぞつとして、わざ〳〵骨折つて來た事を後悔するやうな氣にもなる。

その歌と一緒に混ざつて、ヂンン！　ヂンン！　と、私にはわけの分らぬ物音が聞えてくる。丁度板敷へ銀貨をひどく投げ附けてゐるやうな、非常に澄み渡つた銀の響きである。私はこの震動性の家が、晝の沈默の間も夜の沈默の間と同じやうにいつも音響を誇大する事をよく知つてゐる。併しそれはどうでもよい。私は私のムスメが何をしてゐるんだか、それを知り度いと思つて考へ込む。——ヂンン！　ヂンン！　彼女は環投をしてゐるのだらうか、それとも jeu de crapaud〔蛙の遊び〕をしてゐるのだらうか、——それとも pile ou face〔裏か表か、投げた銀貨の表の出た分を自分が取る遊〕てもしてゐるのだらうか？

そんなものぢやない！　私には當てがついたやうな氣がする。——それで私は尙ほと靜かに、四ん這ひになつて、赤人〔アメリカの印度人〕のやうな用心を以て上つて行く。彼女を驚かす最後の樂みを得たいと思つて。

彼女は私の這入つて來たのを聞きつけなかつた。全くのがらんどうになつ

て、きれいに片づいてゐた私たちの大きな部屋の中にはあかるい日光がさし込んで、生温かい風と、それから黄いろくなつた庭の木の葉が吹き込んでゐる。彼女は脊中を入口の方へ向けてひとりで坐つてゐる。彼女は母の家へ歸るやうに、外出の着物を着て、桃色の日傘が側に置いてある。……

疊の上には、白い美しい銀貨が一ぱい散らかつてゐる。私が約束通り昨日の夕方彼女に與へたのである。彼女は老練な兩替屋のやうな技量と器用を以つてそれを指先でつまんで見たり、裏返して見たり、板敷に投げて見たり、ad hoc〔專用〕の小さい鐵槌で以つて、耳もとで強く鳴して見たりする。——然うしながらも何か知ら鳥の romance みたいな物淋しい唄を一心に唄つてゐる。疑ひもなくそれは彼女が卽興にこさへては唄つてゐるのであらう。……

實に、私の結婚生活の最後の此の光景は、想像以上に日本的である！　私は笑ひ度いやうな心持になる。……昨夜彼女が私と並んで歩きながら二言三言の

小ざかしいことを云つたその言葉にうま〳〵と囚虜になつてゐやうとは、私も何んといふ初心だつたらう。——午前二時の沈默と夜のあらゆる幻惑に飾り立てられたあのやさしい一寸した言葉に迷はされたのである。あゝ私の爲めよりイイヴの爲めといふでもなく、イイヴの爲めより私の爲め、といふでもない。何物も決してこの小さい頭の中を、この小さい心の中を通過するものはないのである。

私は彼女の樣子を十分に眺めてゐた上で、彼女に呼びかける。

——おい！　クリザンテエム！

彼女はまごついて、振り返る。この仕事を見附けられたので耳の根もとまで赤くなつて。

けれども、彼女がそんなに面喰ふといふのは間違つてゐる。——何故といふに私は反對に大變喜んでゐるのである。彼女を悲ませねばならぬかも知れぬと

いふ心配は、私を少し苦めなければならないものであつた。私はこの結婚が初まつた時のやうに、愉快に終りを告げる方が幾ら望ましいか知れない。

——お前のやつてた事はいゝ思ひつきだ。　私は云ふ。　お前の國では贋造貨幣をよくこさへるやうな狡い人間が澤山あるんだから、いつも用心してゐなければならないさ。早く私の居るうちにやつて了ふがいゝ。若し其中から贋が出て來たら、私は喜んでお前に取かへてあげよう。

けれども、彼女は私の前でそんな事をつゞけてするのはいやだと云ふ。私も然う云ふだらうと思つてゐた。そんなことを續けてするには、彼女は餘りに多くの遺傳的な修得した上品な點を有つて居り、程よさを有つて居り、また日本氣質を有つて居る。彼女は横柄な小さい足で——拇指のために特別の鞘のついた眞白い足袋をいつも穿いてゐる小さい愚で——錵貨の堆積を疊のずつとあちらまで押しやる。

——わたし達は屋形の附いた大きな艀舟を備つて置ぎましたのよ。　話を轉ずるため彼女が云ふ。　而してね私たちは皆んなして、お仙さんに、おかねさんに、トッキさんに、あなた方の奥さんが皆んなして、船の出るのを見送りにまゐりますわ。……あなた、お坐んなさいな。そして後生だから一寸の間休んでいらつしやいな。

——休んで行く、私は實際さうしちやゐられないんだよ。私はこれから町で色々用を達して行かなけりやならないんだからね。そして私たちは出帆の全員點呼を受ける爲めに三時までには皆んな船へ歸るやうに命令が出てゐるんだ。その上、お前にも分るだらうが、私はお梅さんの書寢の間に、脱け出したいんだからね。私ば別れ際になつて隅つこへ引つ張つて行かれたり、何か心苦しい場面を牽き起したりすることを怖れてゐるんだよ。……

クリザンテエムは首をうなだれて、それつきり默つて了つた。そして私がど

うしても行きさうなのを見て、彼女は私を見送る爲めに立ち上る。

話もしなければ音も立てずに、彼女は私の後について梯子段を降り、日ざしを一ぱいに浴びてゐる小庭を横切る。其處には身長の低い灌木や曲りくねつた植木が家の他の部分と同樣暑い睡氣の中に浸つてゐる。

外の門の處で、私は最後のさよならを云はうと思つて立ち止まる。クリザンテエムの顏には、これまでなかつた程の高調な悲痛の小さい滋面が現はれてゐる。それは當り前なことである。それは正しいことである。そして若しそんなことが無かつたとしたなら、私は腹立たしく感じたであらう。

さあ、小さいムスメ、私たちは仲よく別れやう。お前が望みとあらば、私たちは接吻もしよう。私は私を娛しませるためにお前を手に入れたのだ。お前はそれに對しては大變よく成功したとは云へない。併しお前はお前の吳れられるだけのものは吳れた。お前の小さい身體も、お前のお辭儀も、お前の小さい音

樂も。要するに、お前は日本のお前の種類の中ではたしかに可愛いゝものであつた。そして、私が、いつか若しも、この美しい夏、このきれいな庭、この蟬の合奏、斯んなものを思ひ出す時に、時折りはそれから關聯してお前の事も思ひ出すことがあるだらうか。それが誰に分るものか。……

彼女は門の閾にひれ伏して、額を地びたにつける。そして私の影が、永久に去つて了ふべき坂道の上に見えてゐる間、彼女は此の丁寧なお辭儀をした姿勢のまゝでじつとしてゐる。

遠く行つてから、私は一二度振り返つて彼女を眺める。——併しそれは單に禮儀からである。彼女の最後の美しい禮に適ふやうに答へたのである。……

私が町にはいつて、大通りの曲り角まで來ると、運よくも私の貧乏な親類の四一五號に出遭ふ。丁度その時私には足の早い車屋の必要があつた。で私はすぐ彼の車に乘る。私が去らうとしてゐる間際に、此の最後の駈けりを私の身内の者と一緒に斯うしてするのも、私の心にはせめてもの慰めとなるであらう。

晝寢の此の時刻に外を駈けまはる習慣がなかつたから、私は此の町の市街が斯んなに日光に威壓され、また熱帶地方を思はせるやうな此の沈默と寂しい輝かしさの中に取り殘されてゐるのを、今まで見たことがなかつた。どこの店の前にも黑い模樣を其處此處に附けた白い日覆が下つてゐる。此の模樣の奇妙な中には何物とも知らず神祕的なものが潜んでゐる。龍の繪があつたり、寓意畫があつたり、象徵的な形があつたりして。空は餘りに輝いてゐる。日光は荒く且つ酷烈である。そしてこの長崎は、その外面が新しい紙で出來てゐたり、ペンキ塗りになつてゐるに拘らず、此のやうに古く、此のやうに蝕んで、此のや

うに朽ち果てゝ見えやうとは私には思へなかつた。これ等の小さい木造の家は、內側は實に白い清潔さを持つてゐるが、外側はくすぶつて、朽廢して、ばらばらになつて、grimacantes［しかめ］である。——よく氣をつけて見ると此の顰め面は到る處にある。澤山な骨董屋の店先に笑つてゐる怖ろしい假面にも、怪像にも、玩具にも、偶像にもある。この殘忍な、斜視な、狂暴な顰め面が。——此の顰め面は建物の中にもある。寺の樓門の腰帶にも、幾千の塔の屋根にもある。屋根の角々や破風までが、古い兇暴な獸がそのまゝの物凄さで生き殘つてゐるかなんぞのやうに、顏を顰めてゐる。

そして何物にも附きまとつてゐる面相のこの物凄い緊張は、本統の人間の顏の殆んど絕對に無表情なのといゝ對照をなしてゐる。通りがゝりに見える彼等の開け放した小さい家の薄明りの中で辛抱强く細々しい仕事をしてゐる此の小さい人々のにこ〳〵したお人よしといゝ對照をなしてゐる。——卽ち日本をま